

崇 禅 寺 遺 跡

—府営崇禪寺鉄筋住宅建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003年3月

大阪府教育委員会

崇禪寺遺跡

—府営崇禪寺鉄筋住宅建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003年3月

大阪府教育委員会

はしがき

大阪府北部を貫流する淀川は、古くは南水と呼ばれた大和川に対して北河と呼ばれ、その流域に土を運び肥沃な平野を作っていました。同時に淀川が運んだ土は大阪湾口を閉塞し、この河水の排水は古代国家の重要な課題がありました。瀬戸内海に通じる淀川は、京都をはじめとした内陸部と各地とつなぐ水上交通の大動脈として利用され、近代初頭までその機能を維持してきました。しかし、自然の営みはこの恵を一転して脅威に変え、人々に襲いかかることも度々ありました。大阪の歴史は淀川をぬきに語ることができません。

崇禪寺遺跡は淀川河口近くの砂堆の上にあって、これまでの調査によって古墳時代初頭には吉備や山陰・近江や東海などの土器が数多く出土し、各地との交流の拠点であったことが知られています。また崇禪寺遺跡から出土し、現在弥生文化博物館に展示されている素環頭大刀柄頭は、九州地方の勢力との軍事的なつながりを考えさせるものとして注目されてきました。

今回、府営住宅の建て替えに先だって発掘調査を実施したところ、古墳時代中期の埴輪が大量に出土し、古墳の痕跡も検出されました。また、遺跡名ともなった崇禪寺の寺域を画する大溝など中世後期の遺構も検出されました。

これらの調査成果は、古代中世の大坂の歴史を叙述するための貴重な資料となるものであります。これら成果の積極的な活用を含め、府民の皆様とともに文化財保護に努めてまいりたいと考えておりますので、今後ともよろしくご協力いただきますようお願ひいたします。

平成15年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例 言

- 1 本書は、大阪府営崇禪寺鉄筋住宅建て替えに伴う崇禪寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 現地発掘調査は、平成13年6月から平成14年8月まで実施し、引き続き同年9月から平成15年3月まで整理作業及び報告書作成作業を行った。
- 3 発掘調査は文化財保護課調査第一グループ技師辻本 武（平成14年3月まで）、同主査阪田 育功（平成14年4月から）を担当者として実施した。
- 4 遺物整理・及び報告書作成業は、文化財保護課調査管理グループ山田隆一・小浜 成と調査担当者が行った。本書の執筆はA区の遺構を辻本、他を阪田が担当した。
- 5 調査及び報告書作成に要した経費は、大阪府建築都市部が負担した。
- 6 本書における平面位置の表示は、国家座標第7系によるが、調査途中A調査区の調査が完了した2002年4月1日をもって世界測地系表示に変更されたため、A調査区の調査成果は日本測地系による旧座標を（ ）内に表示し、B・C調査区の成果は基本的に新座標で表示することとし、旧座標を必要に応じ（ ）内に併記している。水準の表示は東京湾平均海水準を使用している。ただし、現地調査における調査区画の表示と遺物取り上げ時の区画表示はすべて日本測地系による旧座標を使用している。
- 7 現地発掘調査において付与した遺構番号は、A調査区において1から順に、B・C調査区では連続して1から順に付与している。本書では、これを区別するためB・C調査区の遺構には番号の3桁目に0を付して、溝021のように表示している。
- 8 本調査の写真測量は株式会社航空撮影センターと株式会社ウェスコに委託した。なお撮影フィルムについては両社において保管している。
- 9 本調査の土留工設計を第一建設設計株式会社に委託した。
- 10 本調査から出土した遺物の保存処理を財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
- 11 本調査から出土した遺物の写真撮影を有限会社阿南写真工房に委託した。
- 12 調査成果の公開・現地説明会の実施にあたっては、地元自治会、大阪市飛鳥人権協会の協力を得たほか、中島東中学校、啓発小学校では調査成果の説明の時間を提供していただいた。記して厚く感謝します。
- 13 現地発掘調査および本報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導ご助言をいただいたほか、文化財調査事務所の同僚諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表します。
五十川伸矢（京都橘女子大学） 尾上実 北野重（柏原市教育委員会）西山昌孝（千早赤阪村） 森村健一（堺市立埋蔵文化財センター） 森村紀代（小谷城郷土資料館）松尾信裕、松本啓子、櫻井久之・小倉徹也・辻美紀・池田研（財）大阪市文化財協会
- 14 本書は300部作成し、一部あたりの単価は1,995円である。

本文目次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 既往の調査・今回の調査に至る経過	7
第1節 発見から周知まで 梶山彦太郎氏による調査・藤原光輝氏の調査	7
第2節 大阪府教育委員会による発掘調査	7
第3節 (財) 大阪市文化財協会による発掘調査	7
第4節 今回の調査にいたる経過	7
第3章 調査成果	8
第1節 基本層序	8
第2節 遺構の概要	9
第3節 A区の遺構と遺物	9
第4節 B・C区の遺構と遺物	16
第5節 その他の出土遺物	42
第6節 調査成果のまとめ	48

挿図目次

第1図 古墳時代前期地形推定復原図	1
第2図 崇禪寺遺跡周辺遺跡分布図	4
第3図 基本層序模式図	8
第4図 遺構平面図 (200分の1)	9・10
第5図 溝9 遺物出土状況図	12
第6図 A区 溝9出土須恵器	13
第7図 A区 遺構全体図	14
第8図 大溝1 断面図 (北から)	15
第9図 井戸12 平面・断面図	15
第10図 土坑017 平面図・断面図 (40分の1)	16

第11図	B区 西壁大溝021埋土・古墳墳丘崩壊土断面図（40分の1）	17
第12図	古墳墳丘盛土崩壊上分布図	17
第13図	円筒埴輪	19
第14図	円筒埴輪口縁部	20
第15図	埴輪底部	21
第16図	朝顔形埴輪（1）	22
第17図	朝顔形埴輪（2）	23
第18図	線刻をもつ円筒埴輪	23
第19図	形象埴輪（1）	24
第20図	形象埴輪（2）	25
第21図	赤色塗彩埴輪片	25
第22図	土師器	26
第23図	須恵器	27
第24図	ふいご羽口	28
第25図	大溝022 埋土断面図（40分の1）	28
第26図	すきり焼土	29
第27図	大溝021 柱穴列平面図・断面図	32
第28図	大溝021 出土遺物	33
第29図	土坑018 平面図・断面図（40分の1）	33
第30図	溝006・007 平面図（100分の1）断面図（40分の1）	34
第31図	陶磁器	34
第32図	大溝051内 溝058埋土断面図（80分の1）	35
第33図	大溝051 埋土断面図	35
第34図	大溝051 出土遺物（1）	36
第35図	大溝051 出土遺物（2）	37
第36図	大溝051 出土遺物（3）	38
第37図	大溝051 出土遺物（4）	39
第38図	大溝051 出土遺物（5）	40
第39図	落ち込み010 平面図（200分の1）・断面図（80分の1）	41
第40図	軒丸瓦・軒平瓦	43
第41図	丸瓦	44
第42図	平瓦（6分の1）	44
第43図	鬼瓦	45
第44図	石製品（1）	46

第45図	石製品（2）	47
第46図	墨書き器	47
第47図	土製品ほか（2分の1）	47
第48図	遺構変遷図	49

写真図版目次

- 図版 1 調査地周辺航空写真
- 図版 2 遺構全景写真
- 図版 3 a A区 溝9 須恵器出土状況（1）
b A区 溝9 須恵器出土状況（2）
c A区 溝9 須恵器出土状況（3）
- 図版 4 a A区 大溝1
b 列井戸12
c 列井戸8
- 図版 5 a B区 大溝022 手前は大溝021
b 大溝022 埋土断面
c 大溝022 底 スサ入り焼き塊出土状況
- 図版 6 a C区 大溝021 柱穴検出土状況（西から）
b B区 大溝021 柱穴検出土状況（西から）
- 図版 7 a B区 西壁 大溝021 埋土断面
b B区 西壁 古墳墳丘崩壊土堆積状況
c B区 大溝021柱穴
d C区 大溝021 右手前大溝051
e 柱穴25
f 柱穴28
- 図版 8 a C区 大溝051 完掘状況（南から）
b 大溝051 埋土断面（南から）
c A区 大溝1 (=大溝051) 埋土断面（北から）
d・e 大溝051内 落込058
- 図版 9 a B区 落込010 検出状況
b 落込010 完掘状況

- 図版10 a・b 土坑017
c・d 土坑018
e 落込010
f 井戸050
g A区下層土層断面 東一西
h B区 下層土層断面 東一西
i B区 下層土層断面 南一北
- 図版11 溝9出土須恵器（1）
- 図版12 溝9出土須恵器（2）
- 図版13 円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 図版14 形象埴輪
- 図版15 大溝022出土 すざ入り焼土
- 図版16 大溝051出土 土師器皿・墨書き土器
- 図版17 大溝051出土土器 大溝022出土ふいご羽口
- 図版18 大溝051出土輸入磁器 大溝051出土陶器 土製品
- 図版19 軒丸瓦 軒平瓦 鬼瓦

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 天満砂堆

崇禪寺遺跡は大阪市東淀川区東中島5丁目付近に所在する。遺跡は、15世紀半ばに創建されたと言われる曹洞宗寺院崇禪寺を中心に東西約0.8km・南北約0.6kmの範囲に及ぶ。

この地域は淀川の最下流に近く、北には神崎川、南には新淀川が西南西方向に流下している。新淀川は明治43年の改修によって現在の流路を持つことになったが、それ以前は江口で吹田砂堆を迂回するように大きく南に蛇行した後西流し、再び南西に蛇行して、毛馬で西に中津川（長柄川）を分け、本流（大川）は大阪城の北まで南流したのち西に方向を変えて大阪湾に注いでいた。

一方、地形的に見れば、上町台地から北には天満砂堆（あるいは長柄砂州）とよばれる沿岸州の微高地がのびており、崇禪寺遺跡はこの砂堆上に立地していると考えられている。従って、長柄川も大川もこの砂堆を横断する流路をもっているわけで、吹田砂堆を貫流している神崎川（三國川）とともに、淀川流末の流路形成においては、内水排除のための人為を強く意識せざるを得ない。

淀川や大和川の本流とも言える河川流路を固定するような土木工事を為し得なかった古墳時代前期以前においては、上町台地から北にのびる天満砂堆と、千里丘陵の南東部からのびる吹田砂堆が大阪湾口を扼し、淀川や大和川は河内湖に注いだ後、この二つの砂堆の間をいったん北に流れ後、天満砂堆の北側を通って西の海に注いでいたと思われる。「仁徳紀十一年条」の「且河水横遁、以流末不駁」という表現がふさわしい状況（私は「横」を文字通り、海岸に平行にという意味と考えている。）を呈していたと考えられる。

梶山彦太郎・市原実や服部昌之・日下雅義・木原克司ら諸先学による地形復元にみちびかれて、淀川や神崎川が人工的に砂堆を貫流する前の状況を推定したのが第1図である。難波堀江の開削が『日本書紀』にあるように古墳時代中期であるかどうかは保留するにしても、古墳時代前期以前は、およそこのような状態であったと推測される。

崇禪寺遺跡は、人工的な「堀江」が開削されるまでは、水上交通によって大阪湾から河内や攝津の内陸部に通じるまさに「玄関口」の位置を占めていたと言える。



第1図 古墳時代前期地形推定復原図

2 大隅島

大川と長柄川が天満砂堆を横断し、神崎川が吹田砂堆を貫流して第2図のような流路を持った時期には、神崎川と淀川に挟まれたこの地域は、淀川下流の水域にあって比較的高燥で安定した地形環境を維持していたと考えられる。『続日本紀』靈龜二年条にみえる「大隅媛島二牧」は『日本書紀』安閑二年条では「大隅島媛島」と表現されており、島が牧として利用されていたことが窺える。大隅島は、『摂津志』が大隅宮を「在西大道村」と比定して以来、吹田砂堆の中央部がこれに当たると考えられてきた。旧西大道村が旧名を大隅・大内・三宝寺といったとのことで（『新修大阪市史』第一巻55ページ）、これに従えば、神崎川と淀川で区切られた砂堆を「島」と呼んでいたことになる。一方、大隅島と同様に牧がおかれた媛島が長柄川下流の稗島村とすれば、河口近くの三角州を「島」と呼んでいる。牧の位置の比定については、先学の説に従うしかないが、もし大隅島が神崎（三国）川と淀川に挟まれた吹田砂堆であったとしたら、崇禪寺遺跡の位置する天満砂堆の先端部も全く同じ地形環境であって、「島」と呼ばれていた可能性もあるのではなかろうか。

3 二重堤逆川

淀川が江口で南に大きく蛇行してのち西北西に方向を転じ、新家村（第2図A）から再び南西方向に蛇行するが、新家村からまっすぐ北西に向かい引江付近（第2図B）で神崎川に合流していた流路の痕跡が認められる。

この流路を「二重堤逆川」として紹介し、人工河川と考えたのは『西成郡史』であって「大字菅原」の項で次のように記す。

地は恰も古の逆川の故址に當たれり。さても延暦年中淀川と三國川（即此神崎川=括弧内原文二段書き、以下同）との間を疎浚して流を通じ、以て瀧下を改められしも、其後洪水尚氾濫して止まざりしかば、更に柴島（今西中島村の大字）の北（此方角は本村を指す）を鑿ちて水勢を三國川に漏したもの、之を逆川と云ふ。（摂津志に水勢を三國川に漏すとあれば其流は淀川の本流より北流に転じて而も西北の方に流れ、以て三國川に会したるものなるべし。然れども土地人の言に拠れば逆川は三國川より東南に流れたれば此名ありと云へど是理に於いて従ひ難しとす。）（『西成郡史』大正4年 306ページ）

服部昌之はこの流路痕跡を行基開削の「吹田堀川」と考えている。（『新修大阪市史』第1巻62~66ページ）私は行基年譜にみえる吹田堀川は神崎川（三国川）上流部で吹田砂堆を断ち切って通した人工水路と考えるのであるが、それはさておき、「二重堤逆川」と服部が考えたこの流路こそ、吹田砂堆と天満砂堆を避けて自然に流下する淀川本流の痕跡ではなかろうか。

4 中島大水道

淀川・神崎川の河川流路が安定すると、両河川の堤防に囲まれた低地部は排水不良となる。先の「二重堤逆川」の自然堤防と吹田砂堆との間にある、上新庄・下新庄村の南の水田や、天満砂堆より西側の低湿地の排水は土地生産性向上の必須条件であった。

周辺農民の運動が認められ、延宝6年（1678年）に「二重堤逆川」の「新太郎松樋」から此花区伝法の中新田まで、「百姓請け」によって水路が開削され、「中島大水道」と呼ばれるようになった。この結果、生産高の飛躍的向上が実現した。

第2節 歴史的環境

1 砂堆の遺跡にみる地域間交流

天満砂堆上に立地する遺跡は、現在では崇禪寺遺跡・東三国遺跡が知られているほかは、西淡路で、縄文晩期（船橋式土器）が採集されているだけである。しかし、上町台地の東方の河内湾に面して立地する森ノ宮遺跡は、縄文時代以来のこの地域での人の活動を物語る多くの資料を提供した。

縄文時代中期後半にはじまる森の宮遺跡は、後期になって貝塚を形成する。マガキからセタシジミへの変化は、河内湾から河内湖への環境の変化を物語る。また、各時期において、各地から土器がもたらされている。西は九州熊本県の西平式、瀬戸内沿岸岡山県の津雲A式・船元II式・中津式、近畿では元住吉山I・II式・宮滝式・一乗寺K式、関東の堀ノ内式、東北の大洞B C式が出土し、他地域の土器のみが出土するという状態であるという。縄文時代からこの地域は他地域との交流拠点とも言うべき位置を占めているのである。

崇禪寺遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて他地域との交流がますます盛んになる。1981年本府教委による発掘調査では、山陰・吉備・河内・近江・東海の土器が出土したほか、北部九州で出土例が多い鉄製素環頭大刀が出土している。その後の大坂市文化財協会による発掘調査においても、この傾向は変わらず、これまでの例に加えて四国東北部の土器など他地域の土器が出土している。

東三国遺跡は崇禪寺遺跡よりさらに北にあって、天満砂堆の先端近くに位置すると考えられる。地山の細粒砂上に粘土質シルト層の堆積があるので、崇禪寺遺跡とは堆積環境が異なる可能性があるが、古墳時代前期に山陰や吉備の土器が出土しており、布留式期に至っても崇禪寺遺跡と同様の傾向を示している。

2 古墳の築造

砂堆を貫いて難波堀江が開削され、河内湖から大和へ、淀川をさかのぼって山城・大和への水上交通路が成立すると、海上交通を通じた地域交流の拠点としての崇禪寺遺跡の性格は変化する。古墳時代中期には砂堆上に古墳が築かれた。従来から崇禪寺遺跡では埴輪の出土が注意されていたが、今回の発掘調査でも、多量の埴輪が集中して出土し、古墳周濠の一部と思われる斜面が検出されたほか、溝からは供獻されたと思われる須恵器が出土した。

出土した埴輪は、すべて現位置をとどめておらず、周濠斜面に落ち込んでいたものやその他の遺構や攪乱坑からの出土であるが、円筒埴輪のほか、朝顔形・盾・轍・蓋・家・人物・動物などの形象埴輪の破片も含んでおり、相当な規模と内容を持った古墳であったと推測される。



- 1 崇禪寺 2 若竹町 3 寺内 4 垂水 5 片山公園 6 小曾根 7 北条 8 藏人 9 小曾根南 10 垂水南 11 片山
12 吹田城跡 13 池の堂 14 郡邑原 15 高浜 16 高城 17 高城B 18 吹田城跡推定地 19 中の坪 20 五反島
21 東三国6丁目所在 22 東三国2丁目所在 23 漢路 24 宮原 25 福城跡伝承地 26 三法寺跡伝承地 27 上新庄 28 豊郷菅原
29 八雲 30 挿津国分寺跡 31 毛馬城跡 32 長柄西 33 長柄古墳・本庄東 34 豊崎 35 国分寺跡 36 野田城伝承地 37 桥脇
38 中之島3丁目所在 39 天神橋 40 安德寺跡 41 馬喰町 42 麻瀬の宮跡 43 森之宮 44 横並城跡伝承地 45 橋寺施寺
46 文園町 47 長池町 48 馬場町 49 高瀬寺 50 森小路 51 今福 52 高井田

第2図 崇禪寺遺跡周辺遺跡分布図

3 条里地割

神崎川と中津川に挟まれた大溝砂堆西側の地域には阡線が西に8度から10度偏した条里地割が認められる。この地域の条里を詳細に検討した服部昌之の成果に拠れば、旧西村から西に延びる水路及びこれより6町北にあって北宮原村から西に延びる2本の陌線を境に阡線が食い違っていて整合しない。また、北の阡線は西偏が強いので、「三つの地区が時期を逆えて段階的に施行されたものではないかと考えられる。」とし、また中津川以南の南中島地区にも同方位の条里地割があつて、これら条里地域が「古代における西成郡の主要農地を形成していた。」と結論づけている。(『新修大阪市史』第一巻76ページ)

東三国遺跡の発掘調査において検出された10世紀前半に埋没した溝(S D21)が磁北に対して10度西偏している。この地域の条里地割の施行時期を検証する重要な資料である。

(平成10年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 2000. 3 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 3~10ページ)

4 河畔の牧

「牧」は「垂水牧」のように千里丘陵全体を含むようなかなり広大な範囲を囲い込んでいるものがあるが、淀川流域においては河畔の荒地が牧として利用されている。

味原牧は律令期に成立し典薬寮に属した牛牧で、乳牛を飼育していたことから「乳牛牧」と呼ばれていた。この牧が淀川に沿っていたことは、『宇治閑白高野山御參詣記』(永承3(1048)年)や『遊女記』に江口が典薬寮味原厨のそばにあったという記事から窺い知れる。旧北大道村には、乳牛山教照寺があり、かつては三大院乳牛山大道寺があったという。西大道村大隅神社境内の灯籠には「乳牛牧庄三宝寺村」と記するものがある。これらの資料から、旧南大道村・西大道村・北大道村・大道新家村・江口村付近が味原牧にあたると考えられている。

『日本書紀』安閏2年条に「牛を難波の大隅島と媛島松原とに放て」とあって、『日本書紀』編纂時には島が放牧地となわち牧として利用されていた(と認識されていた)ことを示している。西大道村が旧名を大隅・大内・三宝寺と呼ばれていたことから、大隅の牧はほぼ味原牧の範囲に重なって認識されていたことがわかる。牧の内部は中世には開発されて田畠となり荘園となっていく。

5 崇禪寺

1441年、播磨国守護赤松満祐が將軍足利義教を謀殺し、宗禪寺(崇禪寺)に首級を埋めたという(嘉吉の乱)。このことは、『赤松盛衰記』『応仁記』『南方記伝』などに同様の記載があって、當時崇禪寺の地に寺または堂のようなものがあったことがわかる。崇禪寺は、乱後中島郡を所領とした細川持賢によって、堂宇が整えられてゆく。寺の敷地は嘉吉2年に中島惣社の所領「松原内壱町四方」との交換によって成立したと考えられる。寺領は、赤松方の没官領が寄進されたものが多く、また持賢は中島内の茶年貢を寄進している。これら寄進地は室町幕府によって安堵され、寺領が集積してゆく。しかし、これら寺領は寛正3(1461)年の目録によれば、乳牛牧の三

職の田地・麦地・芋地、野田村・福島村・野里村の地頭分・平田分・土豪分などの跡地、現茨木市の忍頂寺名、吹田の倉殿名の半分、山田名分、中島・福島村などの新開分、仏性院の公文給田、中島所の茶年貢などからなっており、領地が散在し、一円支配は実現されなかったと考えられる。

寺は、その後天正年間（1573～1592）に兵火で焼失したが、慶安年間（1648～1652）に再興されている。

第2章 既往の調査・今回調査に至る経過

第1節 発見から周知まで 梶山彦太郎氏による調査・藤原光輝氏の調査

この間の経緯については、『崇禪寺遺跡発掘調査概要・I』(大阪府教育委員会 1982・3) に詳しく述べられている。遺跡発見の契機は、昭和2年中島惣社の北側で弥生土器が発見された事による。これは口縁部を欠く壺形土器で、現在でも中島惣社に保管されている。その後の梶山彦太郎氏による遺物発見地点に関する記述は、梶山氏からの聞き取りによるもので、これが唯一の記録である。これらのデータに基づき、大阪府文化財分布図(1975年)に崇禪寺遺跡として周知されることとなった。この段階での遺跡の認識は、砂堆上に形成された弥生時代の遺跡という域を出ず、内容はまだ不明の段階といえる。

第2節 大阪府教育委員会による発掘調査 1982年

崇禪寺遺跡の内容を初めて具体的に明らかにした調査といえる。崇禪寺の北および北西に位置する府営住宅の建て替えに先立つ調査で、検出された遺構は土坑や溝・土器溜まり等であったが、出土遺物は非常に特徴的なものであった。弥生時代後期末頃から古墳時代初頭の土器が多く出土したが、このなかに他地域の土器が多く含まれることが注目された。河内・古備・山陰・東海・近江など各地の土器が出土したほか、素環頸大刀柄頭が出土して注目された。この調査結果は、崇禪寺遺跡に「海上交通の拠点的な遺跡」「公的性格を持つ港津」「港湾集落」「軍事施設」という評価を与えることとなった。

第3節 (財) 大阪市文化財協会による発掘調査

1988年以降、個人住宅や、市営住宅建設に伴って、(財) 大阪市文化財協会による発掘調査が実施されてきている。これらの調査では、庄内期や布留式期の遺構遺物の他に、奈良時代から中世にかけての遺構遺物や、埴輪が出土する地点があることが注意され、より詳細に遺跡の内容が明らかにされてきた。この間の経緯については、『崇禪寺遺跡発掘調査報告書・I』(大阪市文化財協会1999) に詳しい。

第4節 今回調査に至る経過

今回の調査に至る直接の原因は、府営住宅建て替えによるものである。大阪府建築都市部住宅整備課は、崇禪寺鉄筋住宅他4カ所の府営住宅の建て替えにさきだち、埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて文化財保護課に協議をおこなった。これをうけて、文化財保護課は平成10年10月に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、崇禪寺鉄筋住宅予定地においては埴輪や室町時代の瓦が出土し、室町時代の寺跡や古墳時代の集落跡又は古墳の存在が推定された。この試掘調査結果に基づいて、工事に先だって発掘調査を実施することとなり、平成13年覚書を交わし、同年12月から現地発掘調査に着手し、14年8月現地発掘調査を完了した。

第3章 調査成果

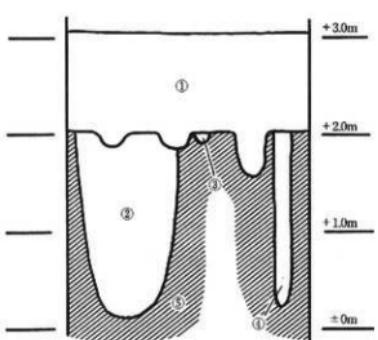
第1節 基本層序

A区における層序は単純で、①表土・擾乱土を除去すると明黄褐色砂の⑤地山となる。この地山面で、②③④等の遺構が検出された。地山面のレベルはT.P.+2.1m前後である。

表土は、昨年度の住宅解体工事の際に敷地全体をかぶせた整地土である。また擾乱土は、第二次世界大戦時の戦災に伴う廃棄物と戦後建設された府営住宅の構造物および昨年度の解体工事時に発生した廃棄物である。地山はサラサラした細かい黄褐色砂である。遺構内埋土の上層はこの地山と同質の砂であり、精査してもすぐに乾燥して白色化するので、この面での遺構検出は容易でない。そして風が吹くと砂粒が移動し、遺構の輪郭線を見つけて引いても短時間のうちに不明となる。あるいは砂は空気に触ると上層として安定しないので、地山面の上を歩くと海辺の砂浜のようにすぐに凹凸となり、そしてセクションや遺構の壁は崩落しやすい。

B・C区においても基本層序はA区と同様である。中世後期の大溝は、面積では調査区の4割程度を占めているので、この大溝埋没後に掘り込まれた遺構も多い。調査ではこの大溝上層から掘り込まれた遺構面を便宜上第1面とした。大溝の埋土は自然堆積層といえるが、シルトを多く含み葉理が観察できないことで識別可能である。

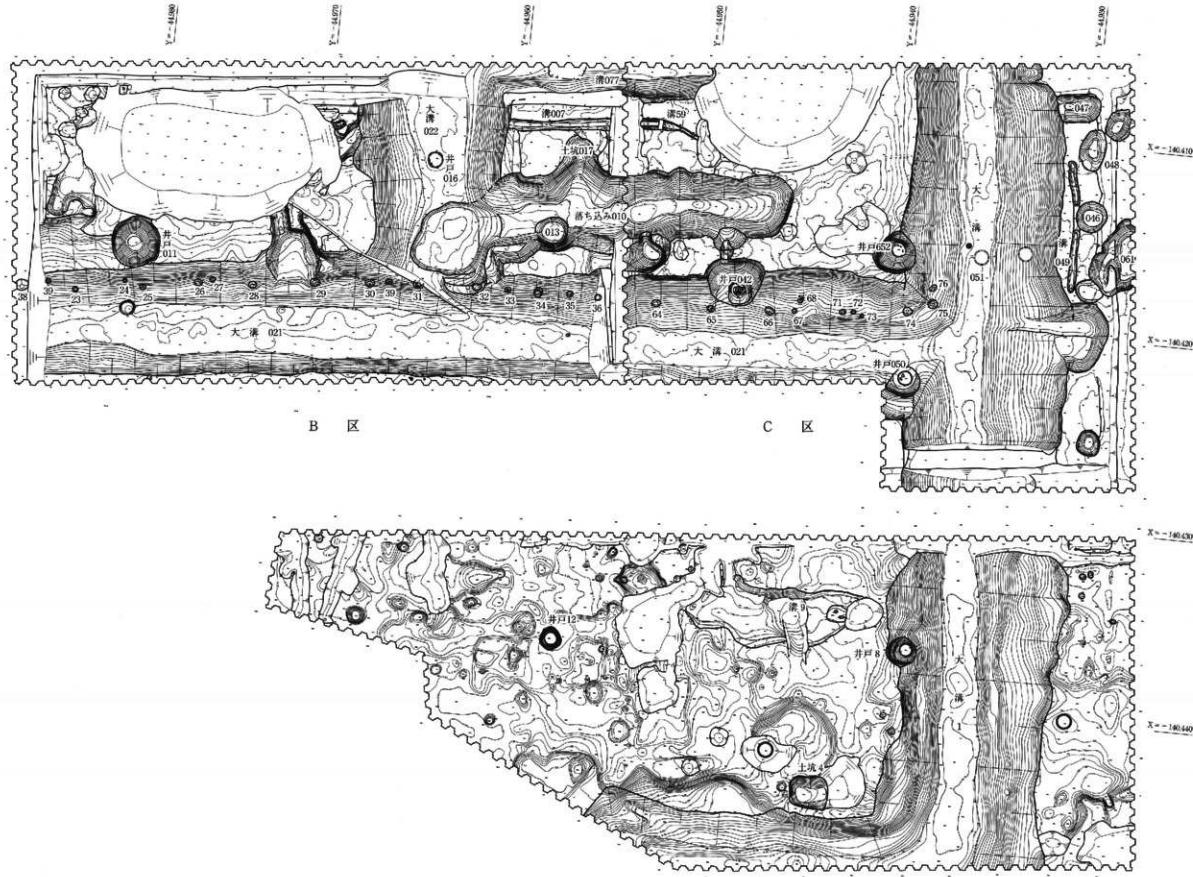
自然堆積層はT.P.-0.5m付近まで観察した。いずれも葉理が観察できた。A調査区での堆積は、東西方向では西に向かって約10度の傾斜で下がり、南北方向の断面ではほぼ水平である。B調査区における松田順一郎氏の観察によれば、最上層に堆積した厚さ60cm程度の円礫混じり細砂層（円礫の直径は2~6センチ）はおおむね北方向からの水流による堆積で、これより以下の淘汰の良い細礫（0.5センチ以下）を層状に含む細砂層は北北東から南南西方向への水流による堆積であるとのことである。T.P.0.5m以下には最大10cm程度の礫を含む粗砂層が堆積していた。



ボーリングデータに拘れば（以下、標高数値はO P）1.5~0.1mには最大4cm程度の礫を含む砂礫層が堆積する。これより下層は-11.5mまで礫混じり砂や砂層が続く。-11.5~-15.5mにはN値4程度のシルト質粘土・砂質シルト層が堆積している。この層以下は、N値30以上の密な砂礫層が連続する。この砂礫層が洪積層上部砂礫層に、上部の粘土層がM a 13層に相当すると考えられている。

①表土・擾乱土 ②大溝 - 1 ③溝 - 9 ④井戸 - 12 ⑤地山

第3図 基本層序模式図



第4図 遺構平面図(200分の1)

第2節 遺構の概要

遺構は大きく分けて4時期に分類できる。

弥生時代末から古墳時代初頭（庄内式期から布留式初期）の遺物が多量に出土している。今回調査の北西約200mで実施された1982年の調査では土坑などの遺構が検出され、多くの遺物が出土しているが、今回調査で当該時期の遺構は、B調査区土坑017がその可能性をもつ唯一のものである。

古墳時代中期の遺構としては、大量の埴輪が出土したことから古墳の存在が確実であるが、調査区内では斜面に堆積した、古墳盛土の崩壊土らしい土層が確認されたのみである。A調査区では供獻器と思われる須恵器がひとまとまりで、溝状の遺構から出土している。

古墳時代以降は、奈良時代の土器がわずかに出土するのみで、15世紀頃までは空白の時期である。

15世紀から16世紀にかけては、崇禪寺に関係すると思われる遺構や遺物が多く検出されている。幅8m、深さ2m近い大溝が、寺の南に二重に掘られている（大溝021・022・051・A区溝1）。それぞれは埋没する時期を異にするが、規模や配置に統一性があることから掘削された時期は同じである可能性が高いと考えている。これら大溝の底近くから柵跡らしい柱穴が検出されていることから、寺自体が出城ないしは砦の機能をもっていたことを推測させる。寺は、戦国時代の争乱で焼失したという記録に符合して、火熱を受けた瓦や礎石などが大量に廃棄された土坑や井戸が検出されている。

江戸時代には調査区は耕作地となっていたようで、瓦枠・桶枠井戸が検出されている。また、この時期に焼失した寺の瓦礎が廃棄されて埋められている（B・C区落ち込み010）。大溝051だけはまだ完全には埋没しておらず、一部は掘り返されて寺域を画する溝として機能していたと思われる。

第3節 A区の調査成果

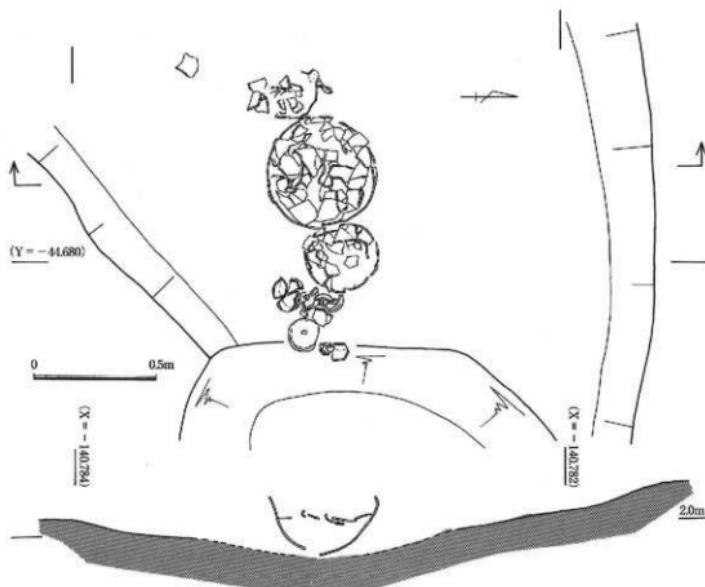
遺構

現地調査では、精査時に遺構と思われるものを発見した順番に番号を付けた。しかし掘削してみると遺構でないことが明らかになるものが少なくなかった。混乱を避けるためにこのような場合は欠番とし、遺構は当初に付けた通りの番号をそのままこの報告書に使用することとした。遺構番号の前に、その性格を表す大溝・井戸といった名称を付している。番号は不变であるが、名称は当初とは変わるものがあるので、今後の遺跡再検討時には注意が必要である。

溝9

調査区中央北に所在する。東西10.0m、南北3.0mの不定形で、深さ0.2m。埋土は地山と同じ黄褐色砂ではほとんど区別がつかないが、埋土の方がわずかに暗い色調である。

遺構の東端部で須恵器の壺、甕（2個体）、壺、高壺（3個体）、高壺蓋（3個体）、杯身が並



第5図 溝9遺物出土状況図

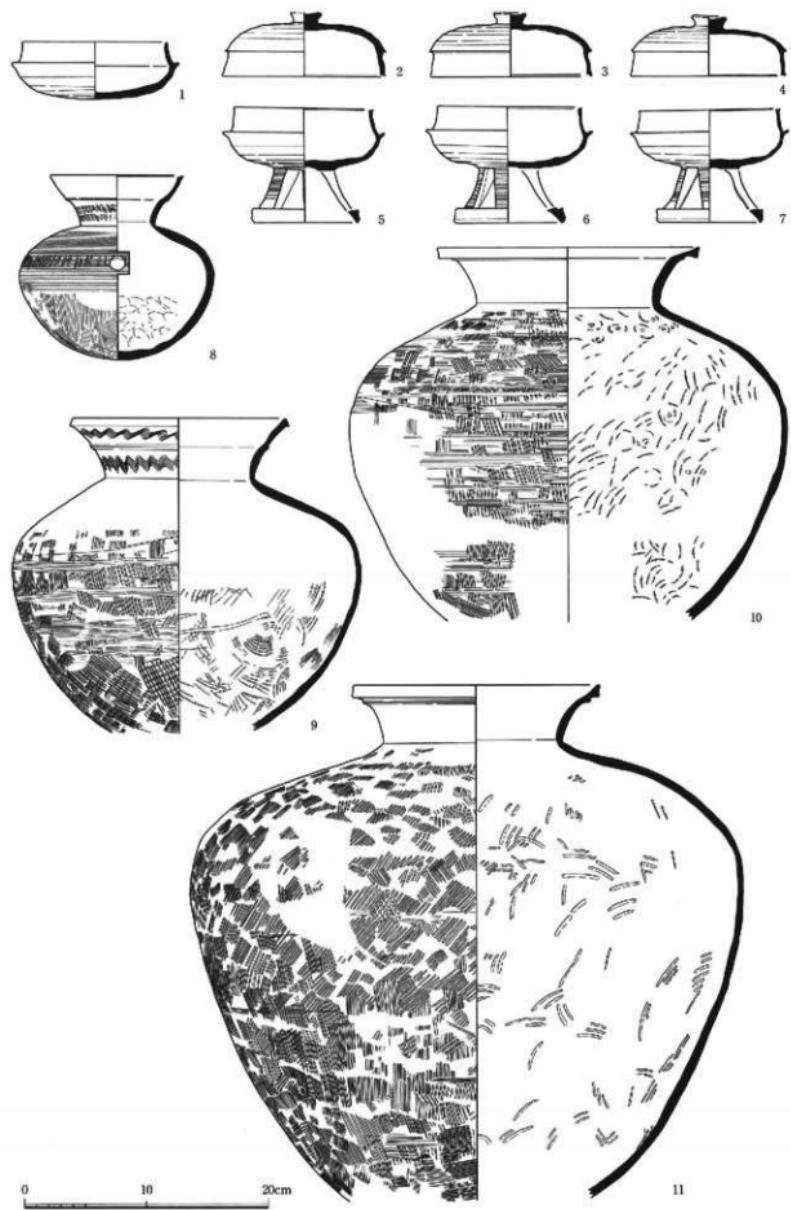
べて置かれた状況で出土した。このうち二つの壺は下半部については据わっていたが、上半部の破片が内に落ち込んでいた。二つとも後世にこの上半部が破壊されたものであろう。また底部が焼成後に打ち欠かれて穴が開いた状態であることに注目される。

以上の遺物は原位置を保ったまま埋没したものと考えられる。

古墳時代の遺構はこれだけであったが、当調査区では後世の遺物に混じって当該期のものが出土しているので、周辺に関連する遺構があったものと判断できる。

溝9出土遺物

高杯類（2～7）は、体部を細かい単位で丁寧にヘラ削りし、口縁端部は凹面をなす。高杯脚部はカキメ調整。杯身（1）は口縁端部を丸く仕上げている。脇体部下半はハケ様の工具で上下方向に調整後ナダを施している。壺・壺は口縁端部幅が広がっているが、端部やや下方に断面三角形の突帯を残している。内面の同心円工具圧痕をスリケシ、小型壺・壺は外面の平行タタキをカキメ状になでている。TK208型式に相当するが、やや古い要素を残すものを含むといえよう。



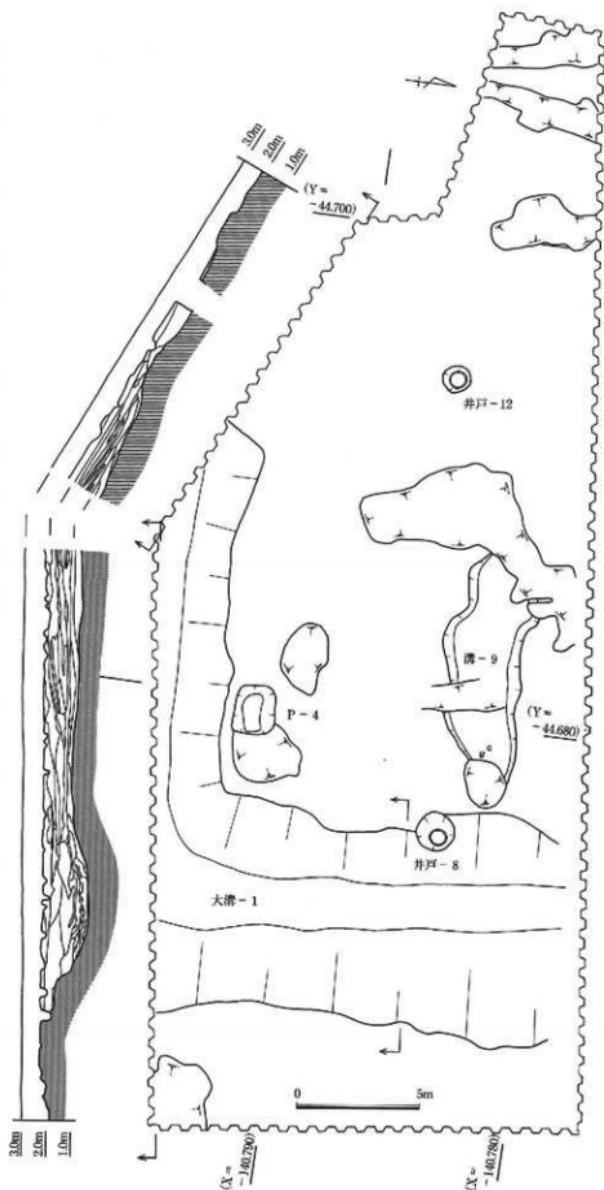
第6図 A区溝9出土須恵器

大溝1

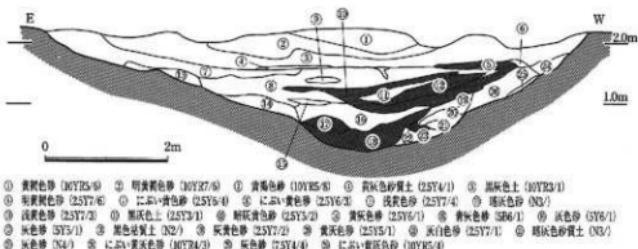
大溝1は、調査区東半部から南端部にかけて直角に曲がる遺構である。東半部における南北方向部分では大溝の幅・深さとも検出することができたが、南端部における東西方向部分ではその北肩部のみの検出となったため幅や深さは不明である。コーナーより検出長を測ると、南北方向部分は17m、東西方向部分は14mとなる。時期は出土遺物より中世後半と考えられる。

遺構の様相が判明する南北方向部分で説明すると、規模は幅8.0～9.5m、深さは検出面の最も高い所から測ると2.0mとなる。大溝の壁の勾配は西側が急で、東側が緩やかとなっている。また埋土は上層が地山と同じ黄褐色砂であるが、中・下層では砂層のなかに有機物の入った黒色～黒灰色土層が挟まる。

この有機物層は大溝内でも西側に片寄つ



第7図 A区遺構全体図



第8図 大溝 1断面図（北から）

て検出された。この層は当時の廃棄物層であろうから、大溝の西側に生活空間があって、そこで発生したゴミが西側からこの遺構に捨てられたものではないかと考えられよう。

なおこの遺構は、コーナーから西へ14mの調査区境界付近で南へやや曲る様相を呈している。確かなことは言えないが、ここが南へ曲るコーナーとなる可能性がある。

井戸12

調査区西半部中央に所在する。径1.3m、深さ1.8mの掘り方の底に、長さ0.95m、径0.6mの木製桶を据え、さらにその上に平瓦18枚を9枚ずつ2段に丸く積み上げて井戸枠としたものである。桶はかなり風化し、その木質がかろうじて残存している状態であった。またタガは本米あったはずであるが、見つけることは出来なかった。

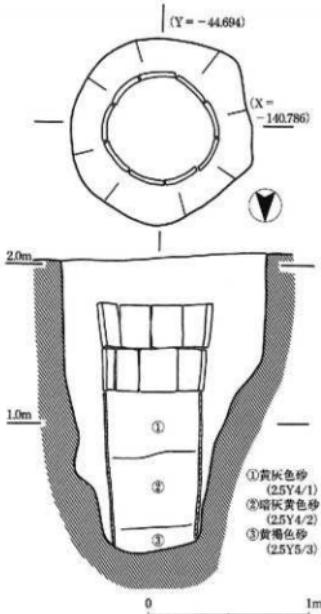
井戸の底のレベルはT.P.+0.2mで、平均海面高にほぼ近い。

井戸内からは近代のものと考えられる白磁碗片が出土しており、これがこの遺構の時期を示すものであろう。

この井戸は戦後建設された府営住宅の時期までには機能を失い、埋められている。調査区の敷地は戦前に畠であり、またこの付近の井戸水は飲料には適さないとされている。従ってこの井戸は、畠に撒く水を確保するためのものと推測される。

井戸8

調査区の東半部中央に所在する。大溝1の西肩を切る関係にある井戸で、井戸枠は木桶のみの残存であった。桶より上は井戸12と同様に瓦積みであったはずであるが、抜き取られており、うち2枚が井戸内に落ち込んでいた。井戸8と井戸12は17.5m離れているが、形状・規模がよく似ており、また時期も同じ



第9図 井戸 12平面・断面図

く近代である。機能も同じく畑に水を撒くものであろう。

土坑 4

大溝 1 が直角に曲るコーナーの内側に所在する。東西2.0m、南北1.5mの長方形を呈し、深さは0.75mを測る。遺構内の西端に、完形に復元できる2個体の土器が出土した。

この遺構は形状・大きさ・位置および完形の土器の出土から、当初は大溝一と同時期の土塙墓と考えた。しかしその後において完形の土器は近代の火消し壺と判明し、また埋土内から焼けたガラス片が出土した。埋土は黒褐色粘質土で周囲の搅乱と同じであったことから、これも戦災に伴うゴミ穴と判断した。

砂堆

崇禪寺遺跡は砂堆の上に立地する。これは「天溝砂堆」あるいは「長柄砂堆」と称されて、上町台地の北端付近から北に長く延びるものである。そして東のいわゆる河内湾を塞いで海と隔絶せしめて河内湖としたとされる。当遺跡はこの砂堆の北の先端に位置する。現在そこから更に北で神崎川が西へ流れているが、古墳時代前期ではその川の周辺が河内湖と大阪湾とを結ぶ唯一の水路となっていたと推測されている。

今回の調査ではこの砂堆を2mほどの深さで断ち割り、その断面を観察する機会を得た。東西方向の断面を北から見ると、水平に東へ1m、垂直に下へ0.1mの勾配で斜め平行に堆積する砂礫層が観察できた。そして南北方向の断面を東から見ると、ほとんど水平堆積の砂礫層を観察できた。従って当遺跡における砂堆は東から西への水の流れによって形成されたことが明らかとなった。そしてこれは淀川の流れる方向に一致するので、この川が形成したものであることが判明したのである。

すなわち天溝砂堆は当遺跡周辺に限れば、海流によって形成されたのではなく、淀川によって形成されたものである。

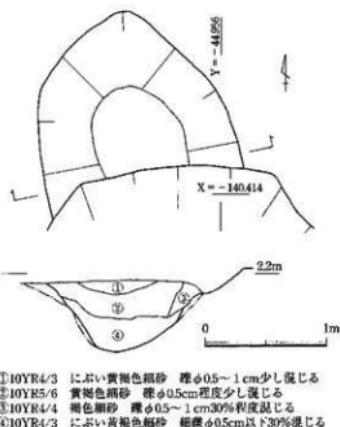
なお砂堆形成時期については出土遺物が皆無であったため、不明と言わざるを得ない。

第4節 B・C区の遺構と遺物

1 古墳時代の遺構

土坑017

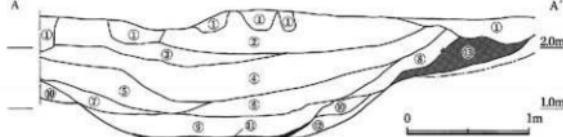
B調査区の北東部で検出した平面円形の土坑で南側約半分が落ち込み010に切られている。復元直径1.6m・残存深さ0.6m、埋土は鈍い黄褐色ないし褐色細砂で細礫を含む。出土遺物は多くないが、庄内期の遺物のみであることから、この時期のものと推定する。



①10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 種々0.5~1cm少し混じる
②10YR5/6 黄褐色細砂 種々0.5cm程度少し混じる
③10YR4/4 黄褐色細砂 種々0.5~1cm程度混じる
④10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 種々0.5cm以上30%混じる
種々0.5~1.5cm少し混じる

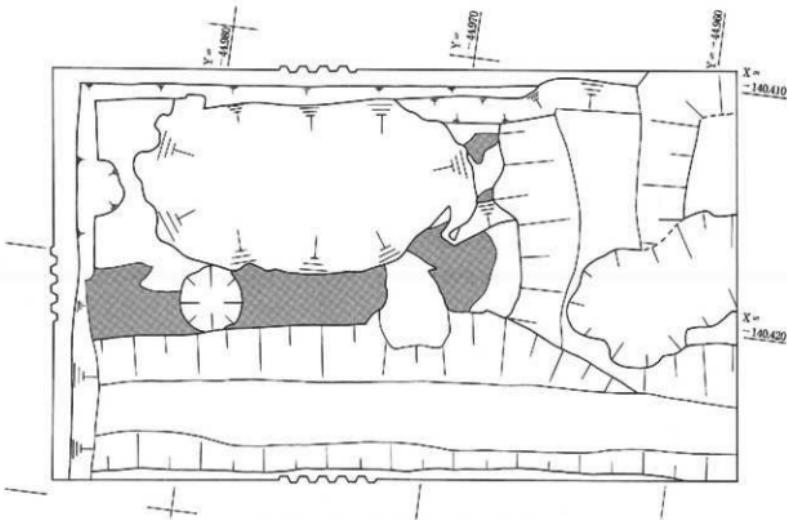
古墳（崇禪寺古墳）

B調査区西側、溝021の北側に、炭化物を含む褐色細砂の堆積がみられた。この層は、南に下がる地山斜面上に堆積し、南は溝021にきられていた。この層は、比較的大きな埴輪片を多く含み古墳時代中期より新しい遺物を含んでいないことから、古墳墳丘盛土の崩壊土である可能性が高いと考えられる。同様の層序・層相を示す堆積土は、第11図⑬層（アミ部分）に堆積しており、この部分の地山の傾斜は墳丘裾部分にあたると考えられる。これらから推定して、この古墳は東西方向の一辺が15m以上で、調査区の北西部の調査区外に中心部をもつと考えられる。墳丘盛土崩壊土が堆積している部分の南辺と東辺の位置に中世の大溝が掘削されていることをみると、中世に至っても墳丘あるいは周濠の一部が残存しており、これを利用、あるいは意識して大溝が掘削された可能性も考えられる。



- ①概層
- ②25Y5/4 黄褐色細～中砂
- ③25Y5/4 黄褐色細砂混雜～中砂 0.3～1cmの礫3～5%含む
- ④と同 0.3～5cmの礫約10%含む
- ⑤と同 0.3～3cmの礫約7%含む
- ⑥10YR4/4 に似る黄褐色細砂泥～中砂 0.3～5cmの礫約10%含む
- ⑦25Y6/4 に似る黄褐色細砂泥～中砂 0.3～1cmの礫約5%含む
- ⑧10YR4/4 黄褐色細砂泥～中砂 0.3～1cmの礫約3%含む 塩物片を多く含む
- ⑨25Y6/3 に似る黄褐色細砂泥～中砂 0.3～2cmの礫約10%含む
- ⑩25Y6/2 に似る黄褐色細砂泥～中砂 0.3～0.5cmの礫約5%含む
- ⑪25Y5/5 黄褐色細砂泥～中砂 1cm程度の礫を約20%含む
- ⑫25Y6/2 に似る黄褐色細砂泥～中砂 1cm程度の礫を少し含む 炭化物礫片多く含む古墳丘崩壊土
- ⑬25Y4/2 暗灰色粗砂泥～中砂 1cm程度の礫を少し含む 炭化物礫片多く含む古墳丘崩壊土

第11図 B区西壁大溝021埋土・古墳墳丘崩壊土断面図（40分の1）



第12図 古墳墳丘盛土崩壊土分布図

古墳周辺出土埴輪

古墳墳丘盛土出土以外にも、現代の擾乱も含めてあらゆる遺構や層から出土している。形状が復元できた埴輪は墳丘盛土の崩壊土出土のものが多い。

1 円筒埴輪

円筒埴輪は、口径の復元できたものでは26cmから27cmである。底部径は19cmのものと、13cm程度のものがあり、概ね中型のものが主体で小型のものが混じっているといえる。焼成は、軟質のものと硬質のものが半ばするが、明確な黒斑をもつものはない。外面調整は突帯間を1周で埋める幅広のB種ヨコハケのもの（12・15b・15・17）、突帯間を2段のB種ヨコハケで埋めるもの（15a）、2次調整を施さずタテハケで調整するもの（13・14・18）がある。破片の観察では10cm程度にわたって静止痕のないヨコハケの破片があったので、ストロークの長いB種ヨコハケ、あるいは「断続的なヨコハケで調整したものも混じるかも知れない。幅広のヨコハケの静止痕はほぼ垂直であり、傾くものはほとんどない。口縁部の形状は直立するものが多く、外反するものがこれに次ぐ。端部を折り返して外側に肥厚するもの（35・36・37）もある。

朝顔型埴輪を含む円筒埴輪底部の形状は、第15図に示すとおりである。外面調整はタテハケが最も多いが、B種ヨコハケを施すものもある。ナデ状のナナメハケで仕上げるもの（54～62）もみられる。

2 朝顔形埴輪

同一個体2個体分が復元できた。このほか、口縁部破片が出土している。復元可能であった円筒埴輪の量と比較しても朝顔型埴輪の量はかなり多いと思われた。11は焼成は軟質、波線部分は突帯径復元による復元接合で、突帯数はこれより少ない可能性がある。底部径22cm、最上部突帯径31.5cm、口縁部48cmをはかる。12は硬質で突帯は3段、底部径15.5cmとやや小型である。

3 形象埴輪

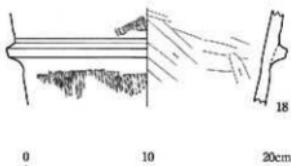
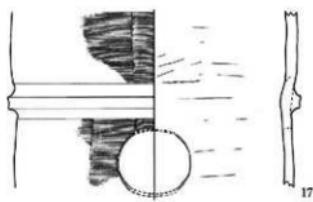
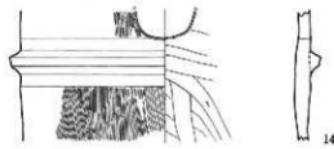
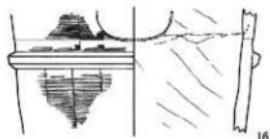
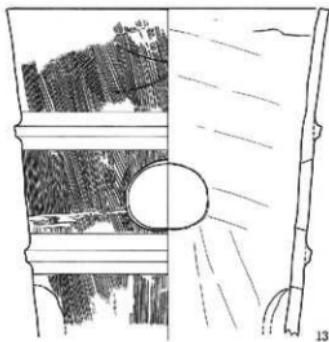
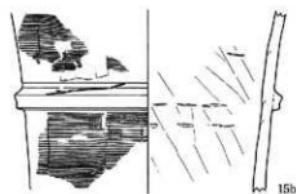
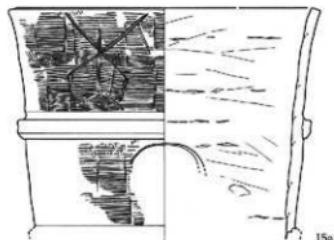
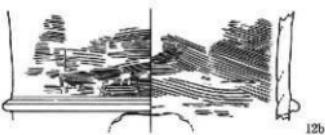
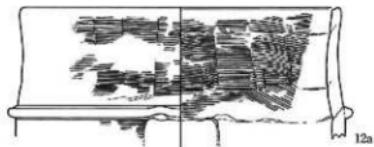
出土した形象埴輪はすべて抽出し、可能なものはすべて図化した。74～82は蓋形埴輪。75は立ち飾りかと考えたが厚さからみて他形態の可能性がある。笠部分外面はB種ヨコハケと同様に調整するものとタテハケ調整のものがある。83～94は平坦な片面に線刻があるので、盾あるいは瓶形埴輪の装飾部分か。95～97は家形埴輪の基底部。98は人物の手腕部、99は馬尾部、110は鳥形の体部、112は尾部。101は猪のたてがみか。104・105は盾、他は特定できなかった。

4 赤色塗彩埴輪

13は外面に赤色顔料で塗彩されている。口縁部下にヘラ書きで×様の線刻をもつ。第20図は赤色塗彩埴輪片のうち大型破片の拓影であるが、出土破片数は85点以上、個体数は10以上を数えている。

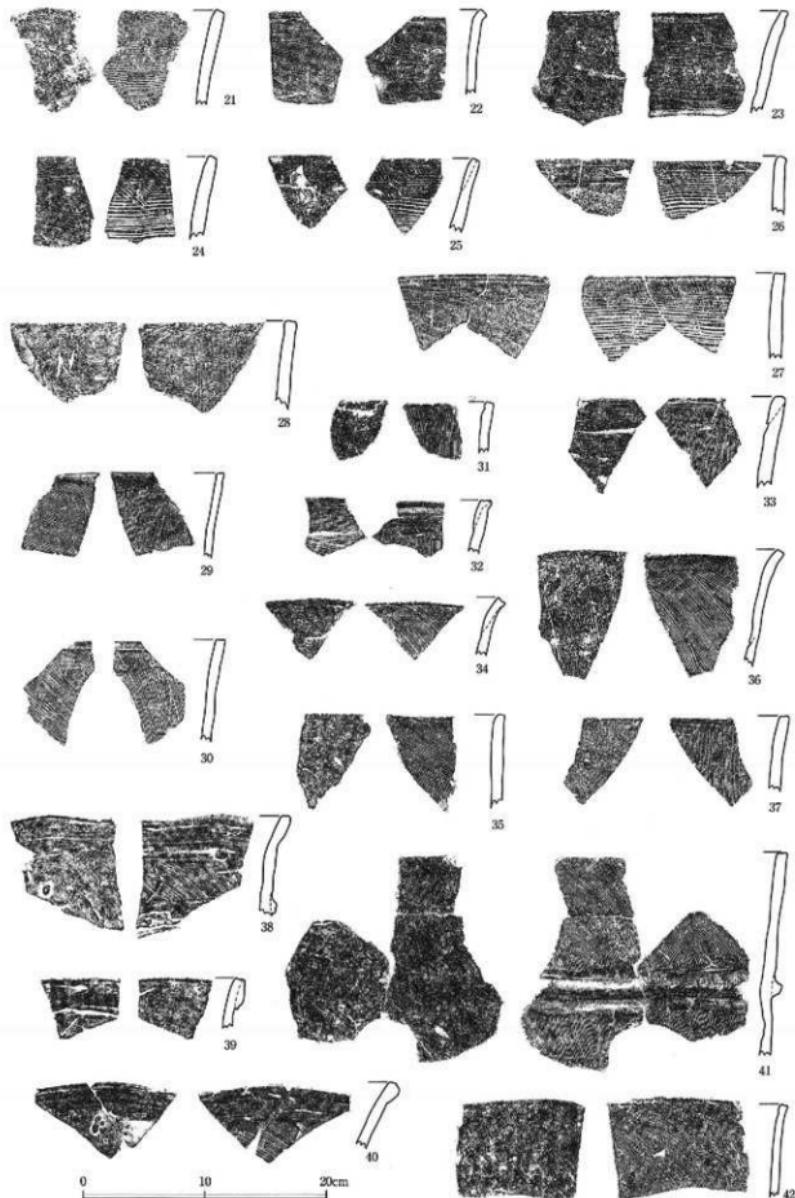
5 線刻をもつ円筒埴輪

記号あるいは文様の線刻・刻印をもつ円筒埴輪が出土している。全体の形状がわかる資料はないが、直線を組み合わせた記号的な線刻（118・123・126・130）、弧線で構成される文様（117・

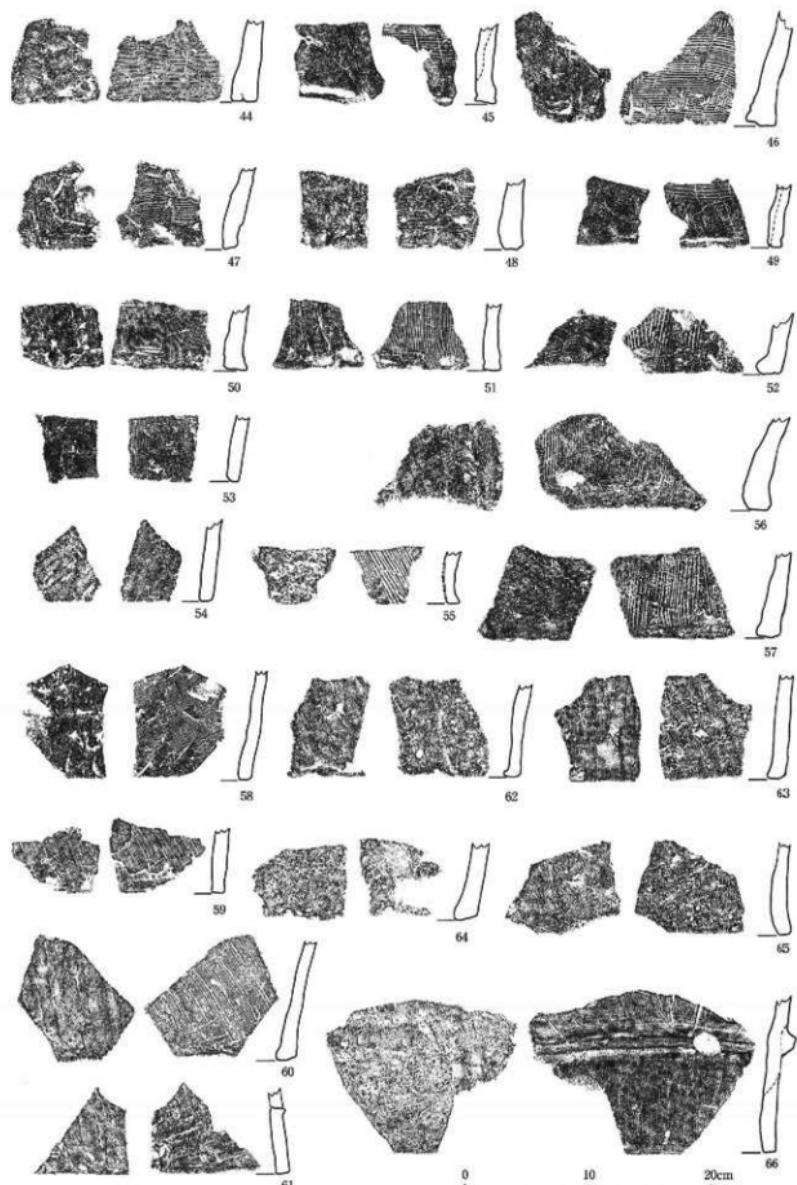


0 10 20cm

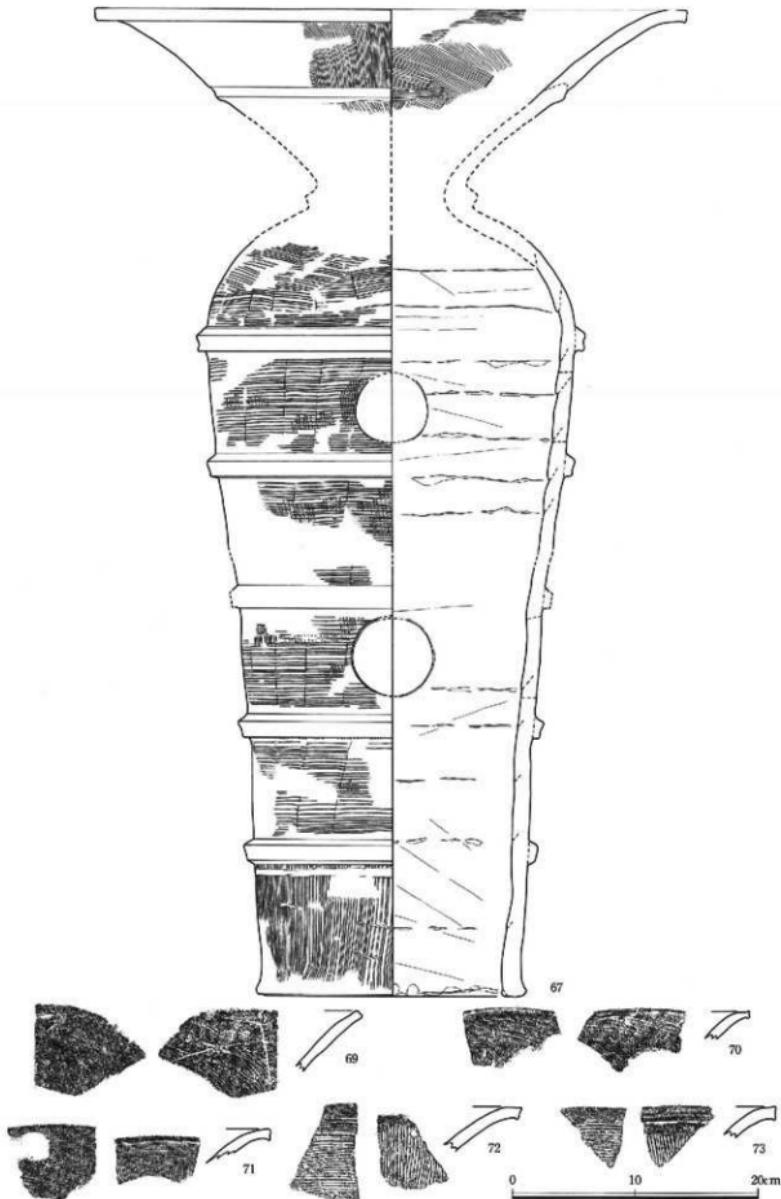
第13図 円筒埴輪



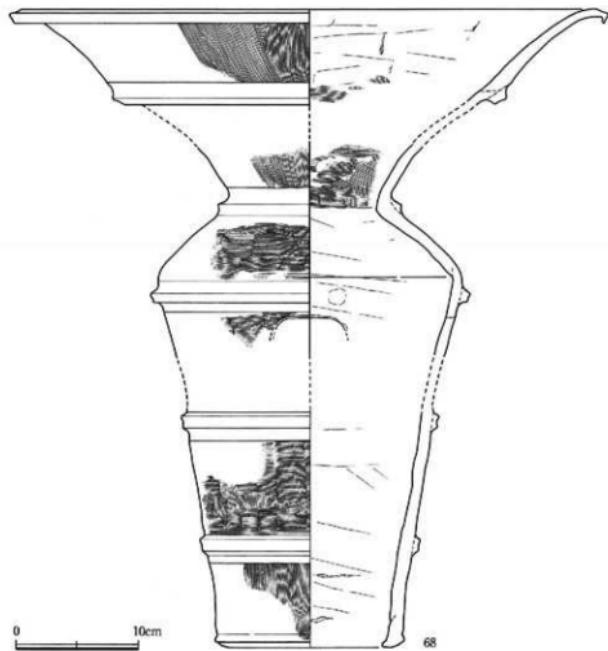
第14図 円筒埴輪口縁部



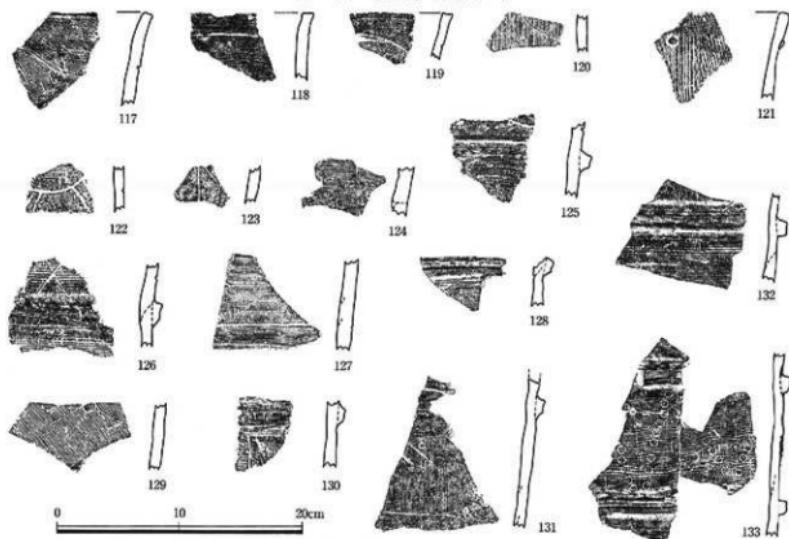
第15図 墳輪底部



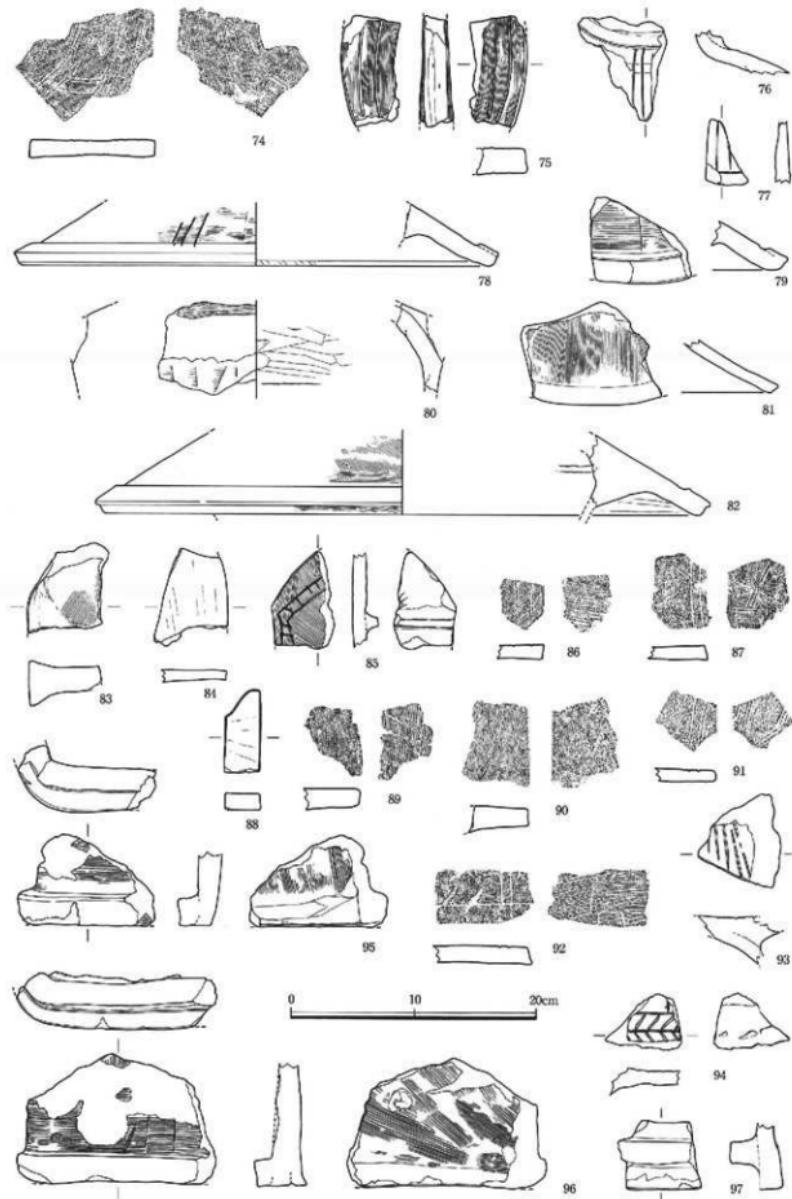
第16図 朝顔形埴輪 (1)



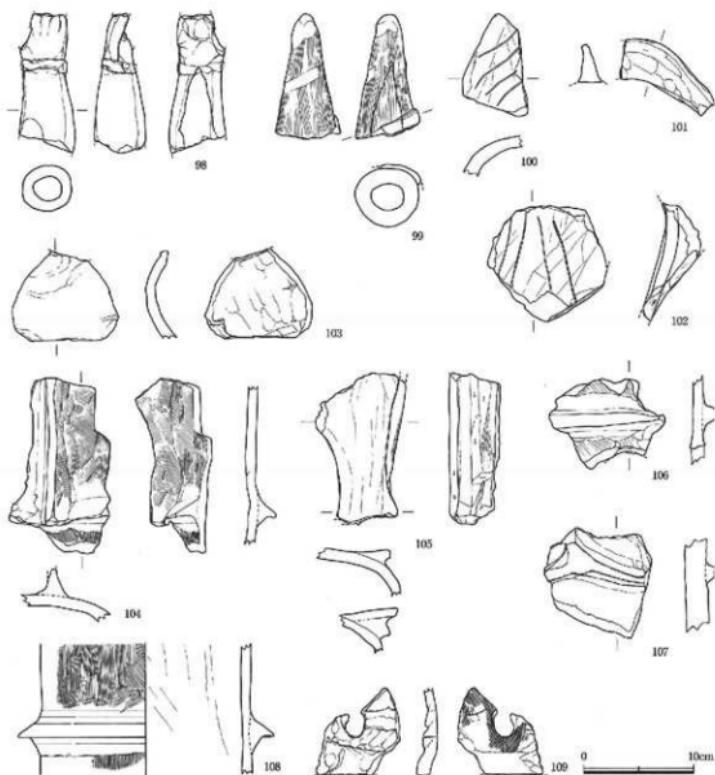
第17図 朝顔形埴輪(2)



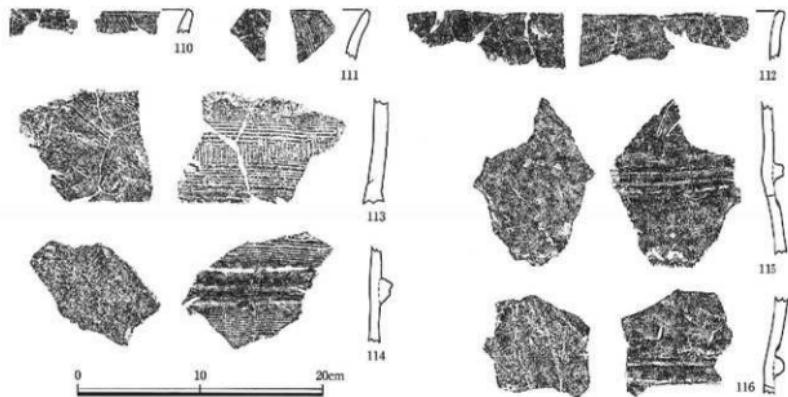
第18図 線刻をもつ円筒埴輪



第19図 形象埴輪(1)



第20図 形象埴輪（2）



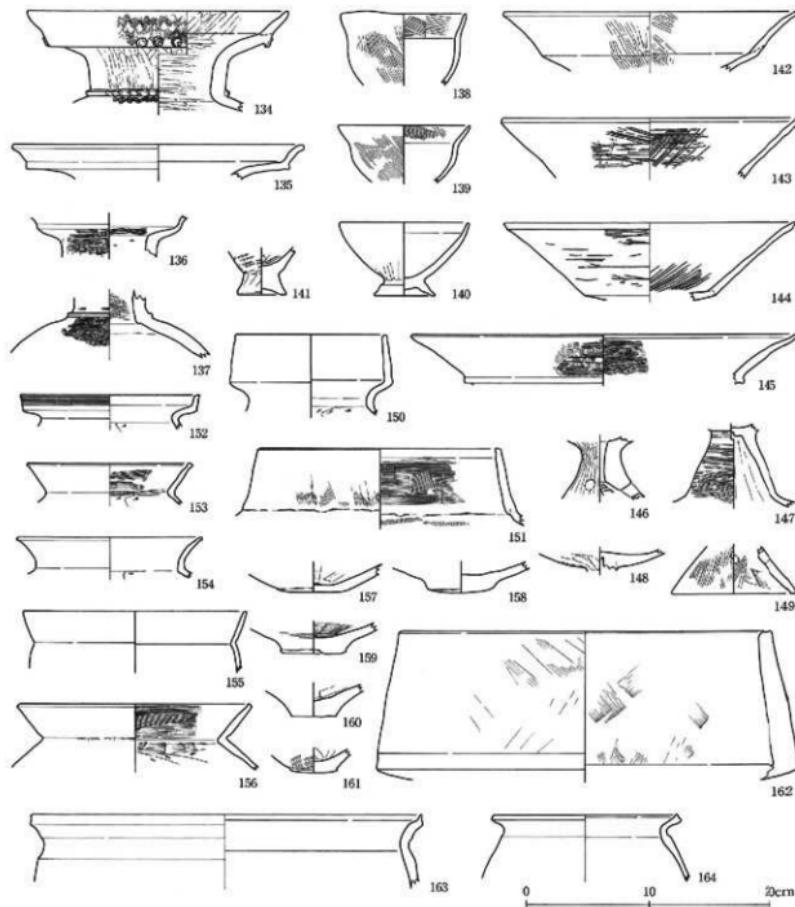
第21図 赤色塗彩埴輪片

120)、弧と直線を組み合わせて具象を表現したかのようなもの（122）、円形の陰刻を山形に連続して施したもの（133）などがある。

古墳時代の遺物

土師器

古墳時代初頭の土師器が各時代の遺構から出土している。同時代の遺構は先述のように土坑017が唯一その可能性をもつものである。ここでは、各層・各遺構出土の土師器をまとめて、特徴的なものを記載する。図化しなかったものも含めて概観すると、壺でみればV様式系の粗いタ



第22図 土師器

タキ目をもつものはきわめて少ない。外面調整はハケ目のものが大多数をしめ、内面のヘラ削りは口縁部との屈曲部より少し下がったところより下に施されているものがある。口縁端部の形状では図示したものの他に、内側に小さく丸く肥厚するものがある。また細かいタタキ日の庄内式壺破片もほとんど含んでいない。小型丸底壺や有段小型鉢の破片は認められなかった。

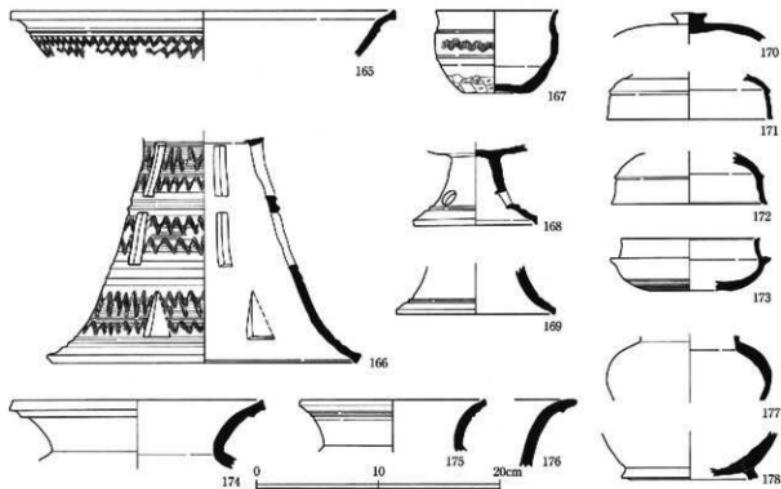
134・136・137は揖津西部の庄内期に多い二重口縁壺で口縁部外面に2段の波状紋・円形浮紋、頸部は縱方向のヘラ磨き、体部との境には刻み面を持つ突帯で飾る。他地域からの搬入品（吉備152、四国北東部150・151・162）も認められる。141は製塩土器。164は8世紀代のものか。

遺物のすべてが遺構から分離し、出土層位や平面位置が多様であるにもかかわらず、大きな型式差をもたないことは、調査地周辺の集落が庄内式から布留式Ⅰ期の限られた時期に営まれていたことを示している。

須恵器

須恵器も各時代の遺構や層から出土している。A地区の溝9出土須恵器以外には同時代の遺構に伴うものはない。溝9須恵器と比較すると、小型鉢（167）の底部の手持ちヘラ削り、高壺（168・169）脚部の形状、壺口縁端部の形状など、より古い要素をもちTK216型式に位置づけられるものが多い。これらの遺物は崇禪寺遺跡において庄内期以後再び活動を始めた人たちが持ち来たった土器であって、古墳築造の時期はこのころに近いと推定される。杯172・173はやや後出。

177は短頸壺、178は壺底部とともに8世紀代の遺物。



第23図 須恵器

2 中世の遺構

大溝022

B区のやや東よりで検出したほぼ南北方向の溝である。幅9m、深さ1.8m、底部は平坦で幅2~3.5m。東斜面側の傾斜はほぼ一定であるのに対し、西側は上部で傾斜がきつく底部近くで緩くなる。

南端は、東西方向の大溝021に切られているが、大溝022の延長線上にあたる大溝021の南肩附近に土止め杭のような自然木片が検出されているので、B調査区より南に延びていた可能性がある。南に約8m離れたA調査区では、溝022の延長線上に溝は検出されていない。

北端は調査区外に延びると思われるが、調査区北端から1.5m付近で東西方向の溝077を検出しているが、これとの切り合いは確認できなかった。

北壁の土層断面図をみると、下層全体と上層の東半分ではほぼ水平の堆積が認められる。上層の堆積は、東側から埋まり西側が規模を減じながら溝の機能を保っていたように見える。9層の上面と8層の一部に有機質を含むシルトの薄層が認められた。9層が堆積した後、この上面が溝底であった時期がしばらく続いたと推測される。最下層には厚さ2cm程度の暗灰黄色シルト質粘土が部分的に堆積していた。

南は溝021に切られているが、溝021が溝022と交差する部分に自然木で溝肩を補強したと思われる部分があった。従って、溝022は調査区より更に南に延びていた可能性が考えられるが、この延長上で8m離れたA調査区では検出されていない。

大溝022出土遺物

溝底近くから、灰青色に還元焼成されたすさ入り粘土塊が大量に

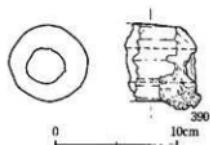
出土したほか、ふいご羽口が出土した。

すさ入り焼土

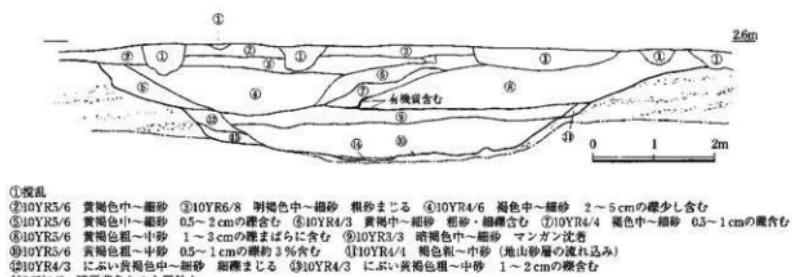
出土位置

焼土は、大溝022の底近くからまとまって出土した。この他にも

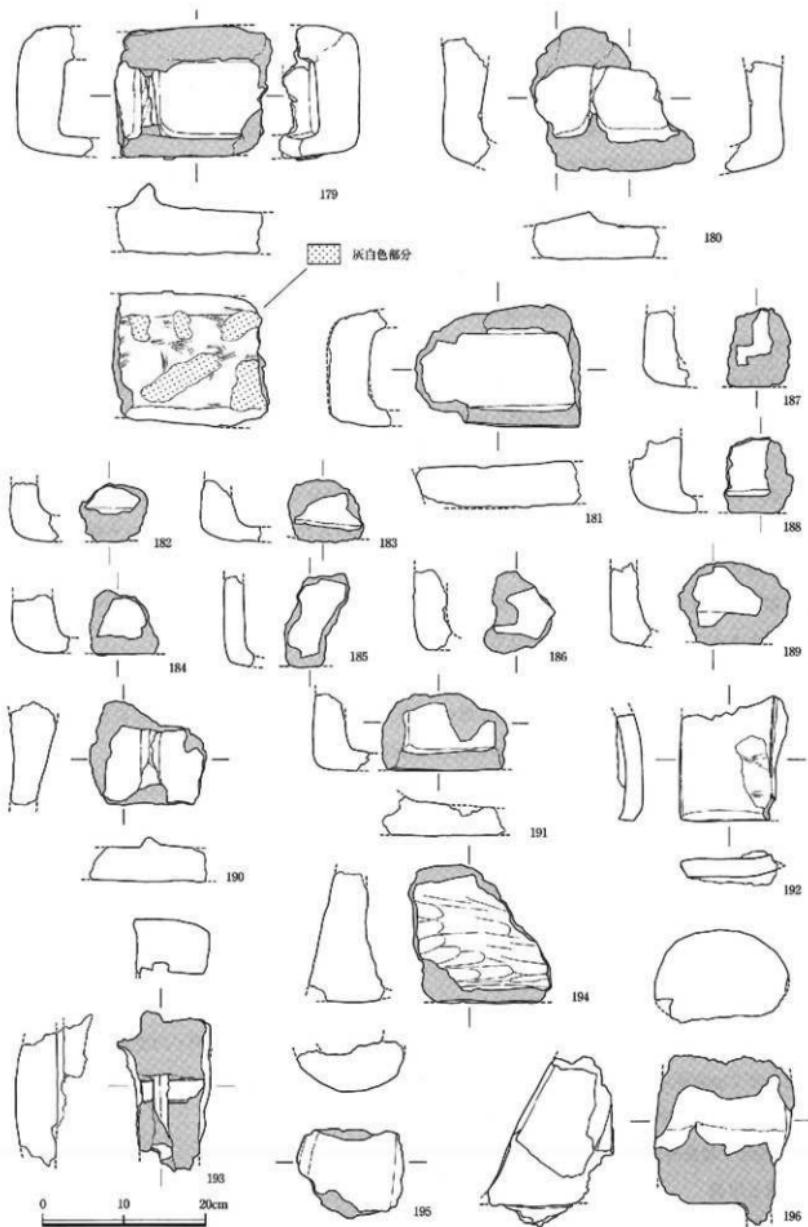
大溝021やその他の遺構からも出土している。量的にも、ひとつの



第24図 ふいご羽口



第25図 大溝022埋土断面図 (40分の1)



第26図 すさり入り焼土 (アミは破断面)

破片の大きさも大溝021出土分が圧倒的に大きい。

形状

破片の形状は、1辺10センチのやや隅の丸い方柱状の空間をつくるようにその周りを厚さ2センチ程度または5センチ程度程度のすき入り粘土で覆ったような形状を呈している。内面は平坦で、木目や構造物の圧痕は見られない。外面も平坦であるが内面よりは粗雑であって、細かいひび割れがあるものが多い。

5センチ程度の厚みをもつものは、方柱の1面のみで外面は平坦なものと、蒲鉾状に中央部がふくらみをもつものがある。蒲鉾状のものの内面は、平坦な外面をもつものそれに比べてやや凹凸が目立つ。両者ともこの面に直角に連続する面の厚みは2.5センチ程度であって、方柱状の破片で厚さ5センチ程度の厚い面が2面以上連続するものはない。

方柱状の空間の端部には粘土が小さく盛り上がって隔壁状を示すもの（179・190）があるが、完全な端部を示すものではなく、同様の空間が連続している。連続する部分ではまっすぐつながるもののみで、方向を変えるような部分の破片は確認されていない。連続する空間の接合部分では左右・上下方向に少しずれ、その結果粘土の厚みがその部分で変化しているものがある（180）。

粘土を支える骨組みの痕跡を残すものが1点だけ認められた（193）。幅2.5センチ程度の竹らしい材を十字に交差した状態の空間が観察できる。粘土の中に含まれるすき（稻藁と思われる）の繊維が残っているのに対して、この部分は完全に空間になっていたので、可燃物が完全に焼失したかあるいは焼成前に抜き去られていたと思われる。

平坦な内面の空間が、外面と鋭角に接するような構造をもつ破片がある（196）。平坦な内面を水平においたとすると、水平面を支える厚い底部分の粘土に、やや斜めに足が付くような構造で、この足の部分の上部が方柱状の空間の終焉端部分になるかのようである。

方柱状の空間を呈する内面は平滑で、擦痕もみられない。外面は調整痕跡はみられないが、1点だけ指での痕跡を明瞭に残すものがある。熨斗瓦片を埋め込んだ破片も出土している。

破片の観察から帰納的に推測される形状は、先述のように方柱状の空間をすき入り粘土で覆ったような形状を基本としている。ただし、方柱部分の全周囲が連続して復元されてはいないので、確定的ではない。

焼成

すき入り粘土はすべて焼成を受けており、外面は黒色、方柱状部分の表面は灰色、断面は灰白色である。炉跡の焼土のように褐色を呈しないので弱いながらも還元状態での焼成と思われる。胎土が2mm程度の細縫が多く含む砂質の強い粘土であることも影響して、表面は比較的硬いものの、欠損部分の断面は非常に脆弱である。

179は平坦な外面に幅2cm程度の帯状に色調が灰色を呈する部分がある。

性格と用途

遺構の一部と考えれば、鋳造関連の遺構の可能性を考えられるが、その場合火熱を受ける部分

ではなく、送風装置から炉への通風路のようなものであろうか。

また、ロストルを持つ瓦窯の隔壁様の構造体の可能性も考えられるが、重量のある瓦を支える構造体の内部を空間にする必然性がない。木材のような芯に巻き付けた粘土とすれば、芯が完全に燃焼してしまったのであろうか。類例を知らず、性格は不明とせざるを得ない。

溝077

B調査区の北端で南肩部分のみ検出した東西方向の溝である。溝の東側はC調査区にのび、延長約10mを確認したが、擾乱によってきられており規模は不明。ただ、C調査区東部では検出されていない。西は、大溝022より西に延びることを確認しているが、地山砂の崩壊により平面検出はできなかった。底は、溝22より0.5m程度浅いと思われる。大溝022との切り合い関係は確認できなかった。

大溝021

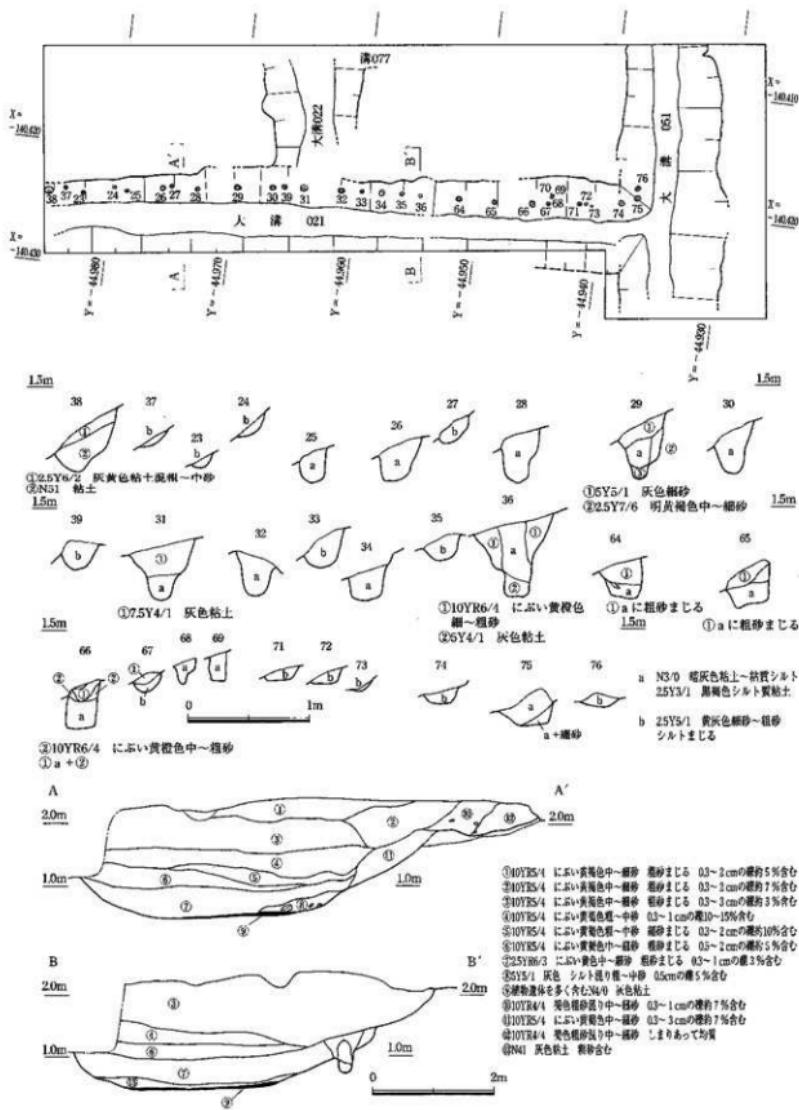
平面での検出は非常に困難であった。調査区西壁と北壁の土層断面で埋土を観察したところ、葉理をもつ自然堆積砂層に比べて、溝埋土は礫の混じり方が不規則でやや黄色みかかったシルトを含むことが特徴であった。断面での識別を手がかりに平面での検出を行ったが、検出時点では東西方向・南北方向の溝が逆T字形に検出された。切り合い関係は平面では検出できなかつたため、東西方向の大溝021の南端を矢板に沿って掘削し、断面を観察した結果、南北溝の東肩の延長上に上層の切り合いが観察されたので、大溝021はL字形の溝であって、東側が埋没した後に掘り込まれたと判断し、調査時点では東西溝のうち南北溝より東側の部分を大溝022とした。しかし、両溝を掘削していくと、東西の大溝021の埋土最下層には全体に粘土が厚さ2~5センチ程度堆積し、北の肩には粘土の上層に灰色の粘質土を少し含む砂層が堆積し、その層の途中から直径30センチ程度の柱穴と思われるピットが東西に並んで検出された。これらのことから、東西方向の溝(021)は南北方向の溝(022)が埋没した後にも機能していたことが確認された。この報告書では東西方向の溝を021とし、これに切られた南北方向の溝を022として記述している。

大溝021は、上端幅7m、深さ約2m、底は平坦で幅は約3m、B・C調査区にかけて延長約45mを検出した。東端は南北方向の大溝051に切られている。西は調査区外に延びる。方位は東で5度北に偏している。埋土は、最下層に厚さ2~5cmの植物遺体を含む灰色粘土が堆積している。地山は3~10cmの礫を含む透水性の高い砂礫層であるが、底部には少々の滲水があったことがわかる。北の肩に近い底部ではやや灰色が強く、粘質シルトを含む層が堆積していた。この層からは、瓦などの遺物が比較的多く出土している。この2層のより上層は、にぶい黄褐色の礫混じり砂層の堆積である。これらの砂層はシルトを含む量によって、掘削後の乾燥の度合いが異なり、微妙な差異で分層可能であった。最下層以外には滲水状況は認められない。

大溝021北肩の柱穴列

柱穴列は溝021が40cm程度埋没した後、北の肩の底近くに掘り込まれている。掘り形は直径50

~80cmで上部がやや漏斗状に開き、下部は直径30cm程度である。埋土は粘質シルト混じりの粗砂のものと、灰色粘土のものがあるが柱の痕跡は確認できなかった。粘土で埋められた柱穴はいず



第27図 大溝021柱穴列平面図・断面図

れも底の高さがT.P.0.7~0.8mで揃っており、平面的にはほぼ3m間隔で、ほぼ一列に並ぶ。東端の柱穴は大溝051の位置で北に折れて終わっているので、両溝が同時に機能していた時期があるのかもしれない。シルト混じり粘土で埋没したやや小さい柱穴は、主柱穴の間にあって、隙間を補完するように配置されている。

これら柱穴群は、柱間距離や位置の企画性には厳密さが無く、臨時のな柵のような構造物であったと考えられる。

大溝021出土遺物

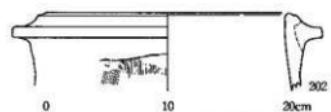
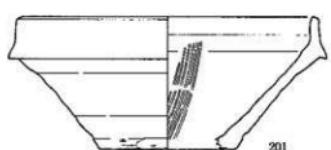
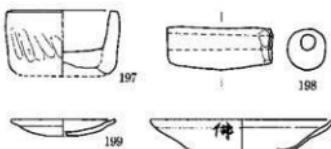
溝からは、多量の瓦の他、比較的強く焼けたすき入り粘土の破片、鉄滓、土師器皿（199・200）瓦質香炉（179）、備前すり鉢（201）土師質羽釜（202）などが出土している。土師器皿（200）は外面に「佛」の墨書きがある。

土坑018

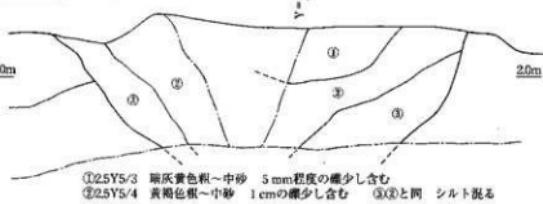
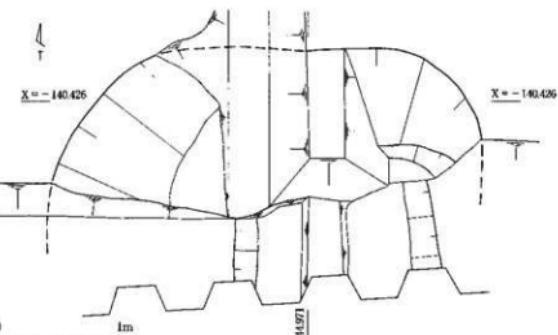
B調査区中央部南端、大溝021が没した後に掘り込まれた土坑である。トレンチ南端にそって掘削した側溝で断面を発見し、平面を確認した。復元平面形は円形ないし梢円形で東西3.5mを計る。深さ1.2m以上で、土坑のやや東よりも最も深くなっている。埋土は暗灰黄色から黄褐色の粗砂で、中央部が落ち込むように下がっている。土坑内から完形の土師器小皿（203・204）が出土していることから墓である可能性が考えられる。

溝006

B調査区北東部で検出した。大溝022が埋没してから掘り込まれている。残存最大幅1.1m・深さ0.35m、埋土はにぶい黄褐色粗砂。



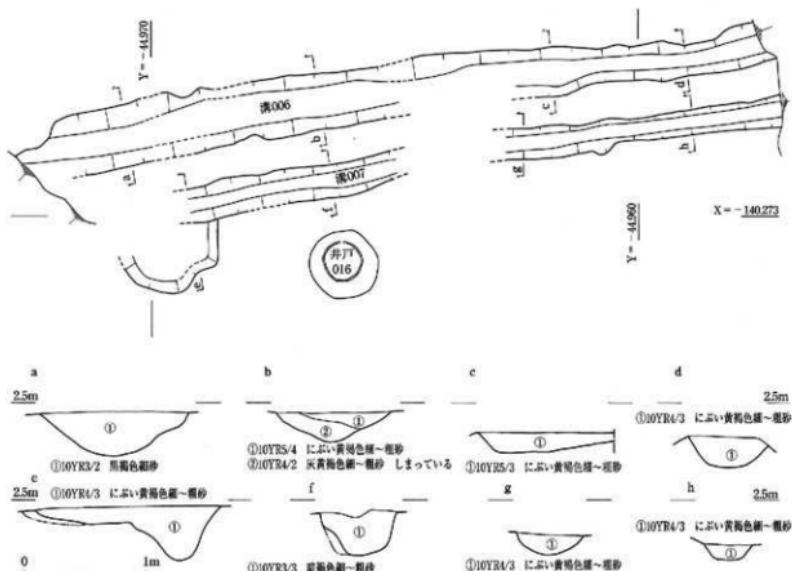
第28図 大溝021出土遺物



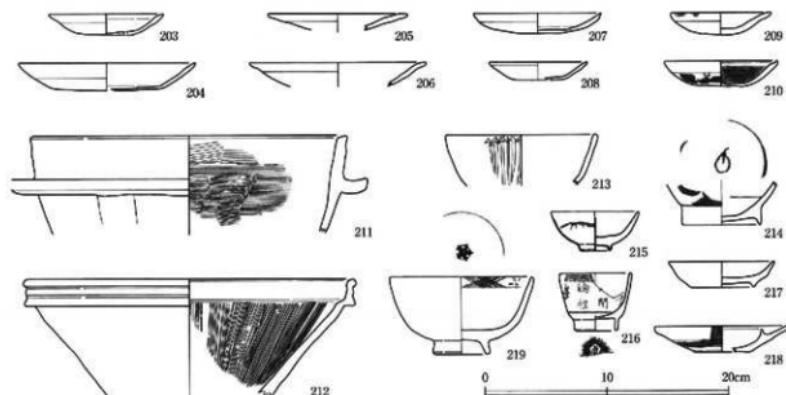
第29図 土坑018平面図・断面図 (40分の1)

溝007

大溝022埋没後に、溝006とほぼ平行に掘られた溝である。残存最大幅0.6m・深さ0.35m、埋土は溝006と同様である。ほぼ直線的にのびてC調査区の溝059に続き、南に蛇行してとぎれている。直線部分での方向は東で8度北に偏している。



第30図 溝006-007平面図(100分の1)断面図(40分の1)



第31図 陶磁器

3 近世の遺構

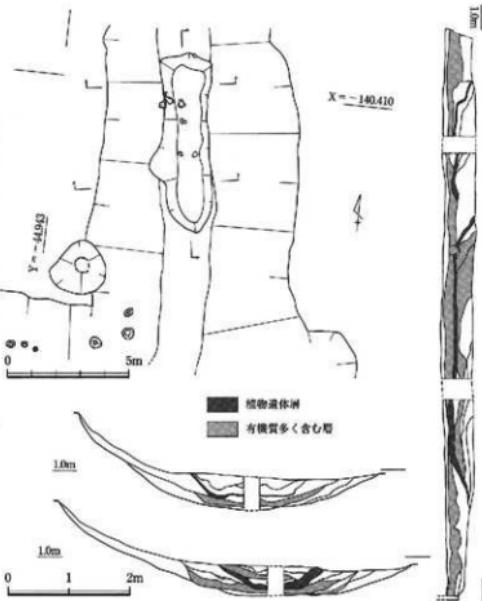
大溝051

大溝021の東端にこれと直角にとりつくように掘られた溝で、北で5度西偏方向をとる。上幅約8m、下幅2~2.5m、深さは1.7m程度、底は平坦である。斜面の傾斜は西側が強く45度近い急斜面となる。外部に面した東斜面は西斜面より緩い傾斜となっている。北は調査区外にのび、南はA調査区の大溝1に続く。現崇禪寺境内の東限築地堀の延長線上に位置している。

溝内の堆積土層は、中間と下層に2層の黒色の有機質を多く含む層があり、これを境にして大きく4層に分層できた。有機質土は西北に厚く堆積しており、当時の居住域が溝の北西、すなわち現在の崇禪寺の方向にあったことを示している。

溝058

大溝051を掘削する途中で、有機質が集中して堆積した部分を検出した。位置はC調査区の北寄りの大溝051内中央部、溝底から0.6m上まで大溝051に沿って南北に7m・幅約2mにわたって堆積していた。東西の壁は大溝の傾斜よりも急で、大溝が埋没する途中で2回以上掘りなおした様相が断面で観察された。

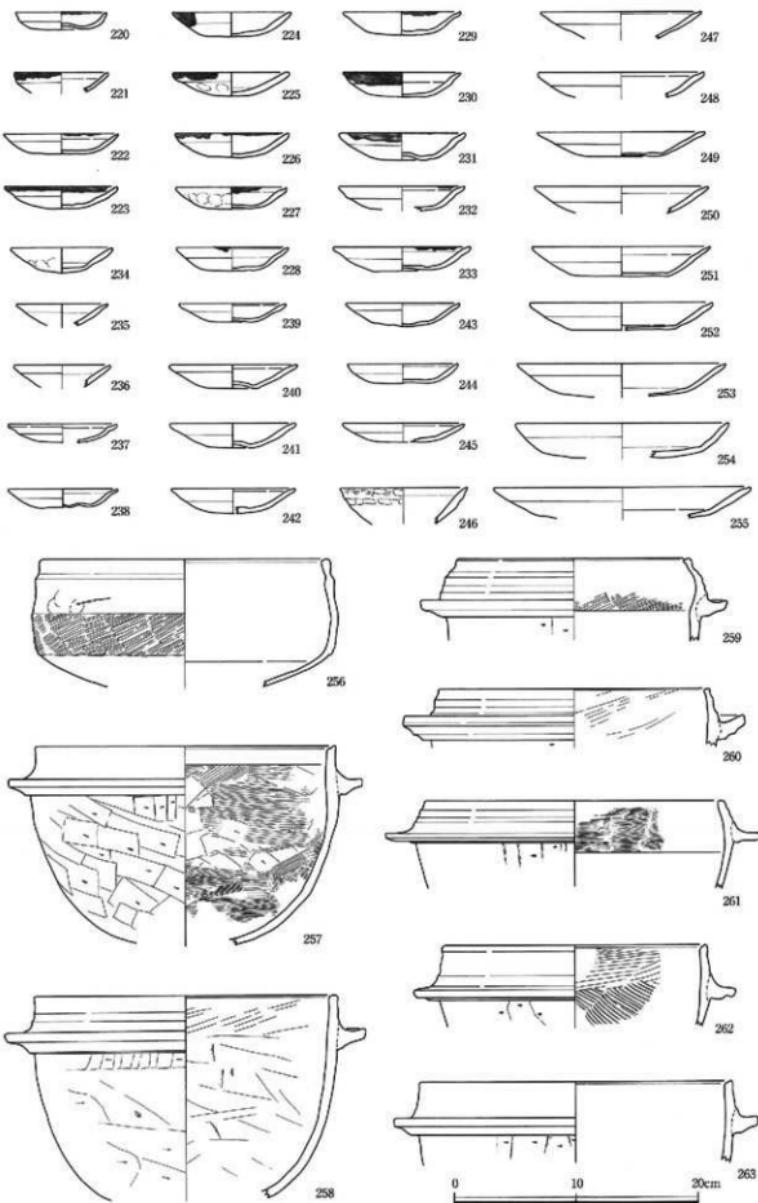


第32図 大溝051内溝058埋土断面図（80分の1）



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------|
| ①2SY3/4 黄褐色斑～中砂 | ⑨10YR2/1 黑色粗砂混シルト 有機質多く含む |
| ②2SY4/3 オリーブ褐色～中砂 シルト混る 0.5～3cmの繊少し含む | ⑩2SY4/2 暗灰黄色～中砂 シルト少し混る |
| ③2SY4/2 暗灰黄色～中砂 シルト混る 0.5～3cmの繊少し含む | ⑪2SY5/2 暗灰黄色～中砂 有機質少し含む |
| ④2SY4/1 黄灰色シルト混粗～中砂 0.5cmの繊少し含む | ⑫2SY5/6 黑色 0.5cm程度の繊少し含む |
| ⑤2SY3/2 黑褐色シルト混粗～中砂 | ⑬2SY5/2 黑色シルト 有機質多く含む |
| ⑥2SY4/1 黄灰色～中砂 シルト少し混る | ⑭2SY6/2 黑褐色～中砂 シルト少し含む |
| ⑦2SY5/4 黄灰色～中砂 均質 0.5～1cmの繊少し含む | ⑮2SY5/4 黄褐色～中砂 均質 0.5～1cmの繊少し含む |
| ⑧2SY3/1 黑褐色シルト混粗～中砂 0.5cm程度の繊少し含む | ⑯2SY6/4 ふい黄色～中砂 0.5～1cmの繊少し含む |

第33図 大溝051埋土断面図



第34図 大溝051出土遺物（1）

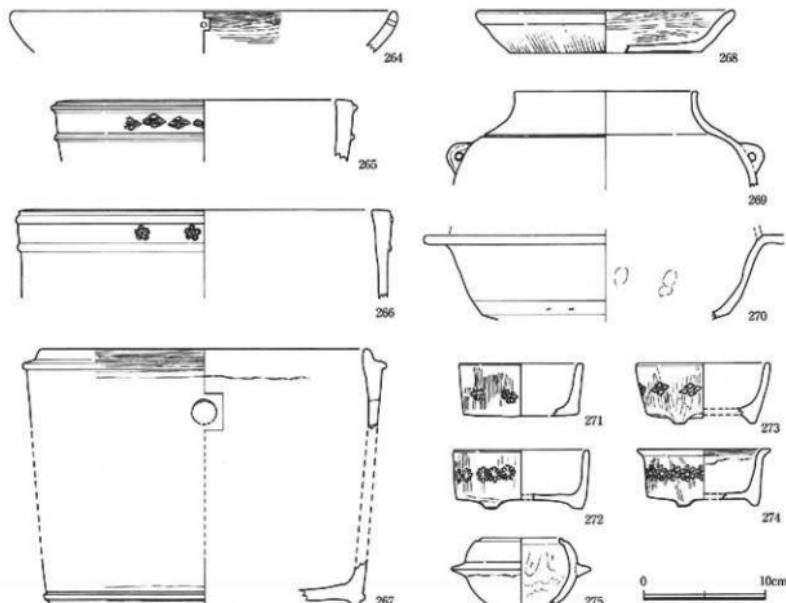
大溝051出土遺物

最も遺物の出土量の多く、各時期の遺物を含んでいるが、これらの遺物は同時に寺院建立と盛衰の経緯を全体として示しているといえる。なお、古墳時代の遺物も多量に含んでいるが、先に示したとおりである。

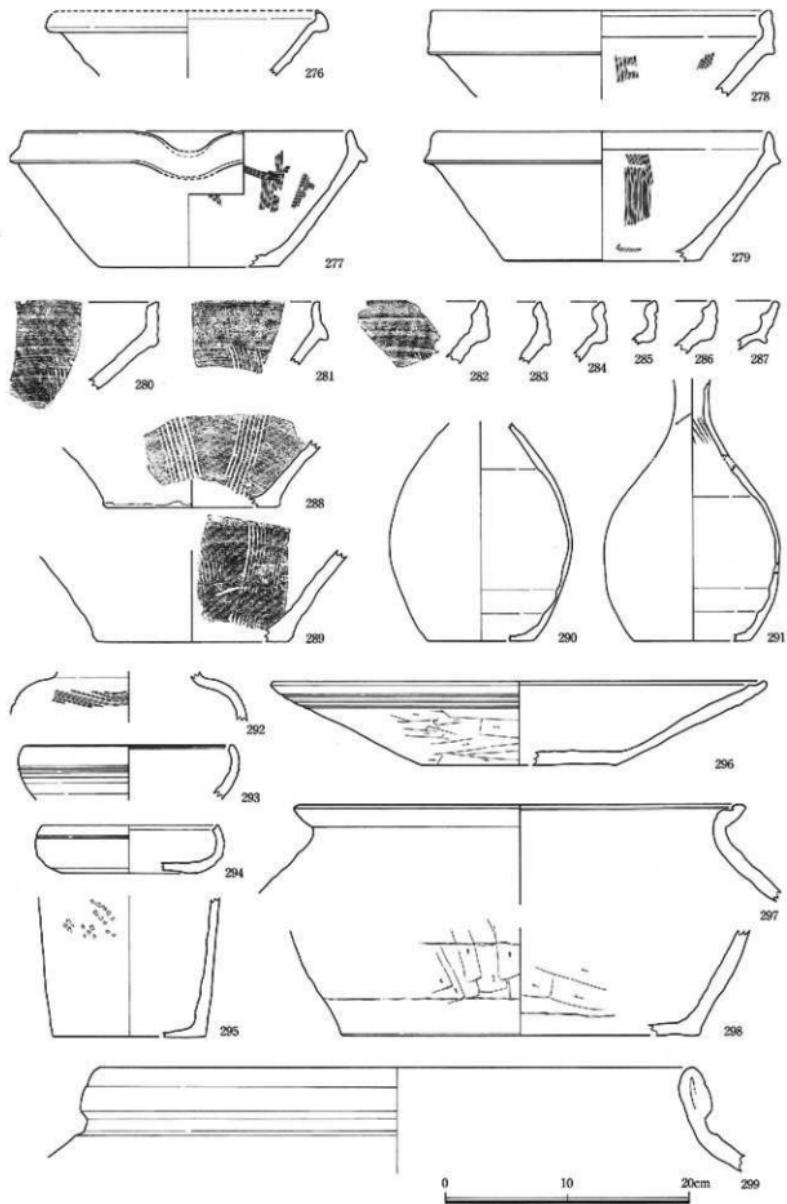
土師器皿のうち、中小型のものの約半数は、口縁部に煤が付着しており灯明皿として使用されている。色調は淡褐色を呈するものがほとんどで、中小型は深さ2センチ以下の浅いものである。やや上げ底気味の底部のもの（240・241）もあるが、底部から口縁部にゆるやかにつながるもの、底部と体部の区別もなくなっているものがある。いずれも口縁端部は外反気味である。大型のものでは、底部と体部の屈曲が明瞭で、内面底部の外縁に浅い凹線状の園線をもつもの（252）もある。15世紀後半から16世紀末頃までの時間幅をもつものであろう。

256は播磨系の土壙。羽釜は250・251が土師質で16世紀代、259～263は瓦質で概ね15世紀代のもの。

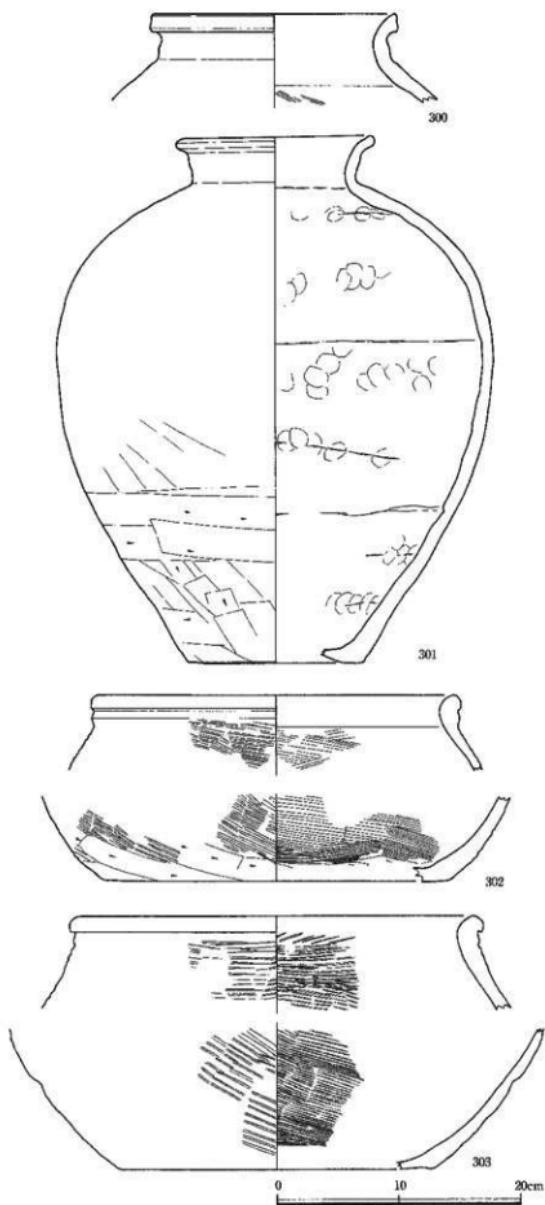
瓦質土器のうち、264は盤か。265・266は深鉢で265には四つ菱、266には五花弁紋のスタンプを口縁部下に連ねている。267は風炉、269・270は金属器を模倣した釜、271～274は香炉でそれぞれに菱形や花弁紋の印刻がある。275は小型の羽釜である。15世紀前半以前に盛行する浅



第35図 大溝051出土遺物（2）



第36図 大溝051出土遺物（3）



第37図 大溝051出土遺物（4）

鉢は出土していない。

陶器では備前焼きが量的に多い。第36図276は東播産すり鉢、297・298（同一個体）が13～14世紀頃の常滑焼の他はすべて備前焼である。すり鉢では277が15世紀中葉に遡る他は、16世紀末ごろまでの時期のものとしてよい。盤（296）は割れをを黒漆でつないだある。大甕299は肩部にゴマ様の自然釉がかかる、15世紀後葉ごろの产品。

300は胎土は須恵器のような灰色で外面は光沢のある黒色の陶器である。魚住神出窯13世紀頃の製品か。301は信楽焼き壺、底部全体を漆で接いだ痕跡がある。口縁端部を丸く収める形からみて16世紀後葉のものか。

302・303は瓦質甕、口縁部は正縁状に近くなるが、外反していた形状をわずかに留めている。15世紀後半ごろのもの。

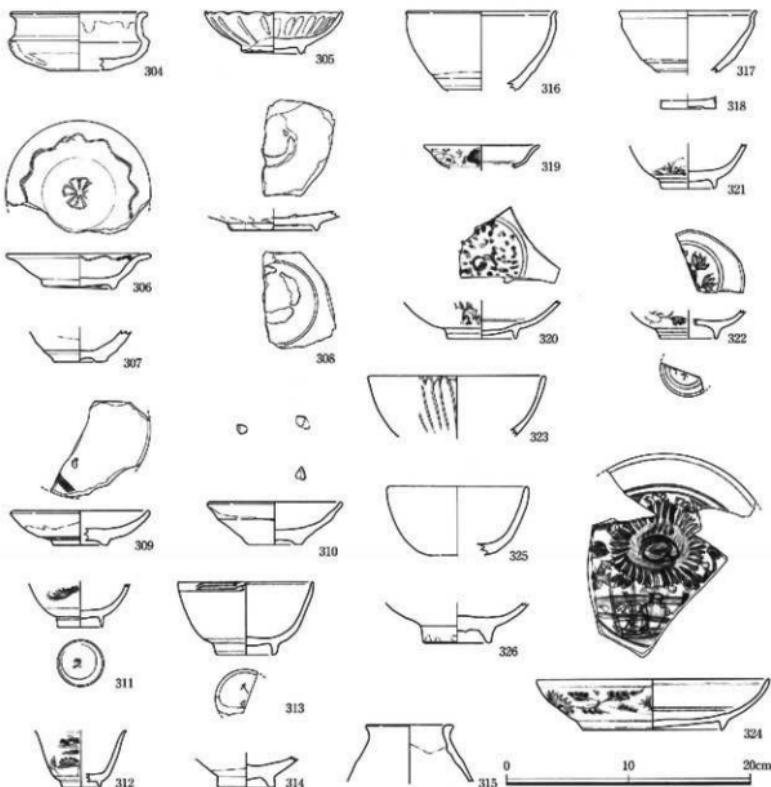
碗・皿類では、中国製品を含み产地は多様である。304は瀬戸香炉、外面は緑色かかった透明釉がかかる。内面露胎で使用により煤付着し黒変している。15世紀代の製品。305は瀬戸灰釉菊皿で白色の化粧

土をかけた上に施釉。306は美濃皿、内面に稜花を線刻、見込みに花弁紋のスタンプ。308は瀬戸美濃皿。316～318は美濃天目碗。以上は16世紀代の製品。

319から324は中国製磁器。319は青花牡丹唐草文皿、320～322は青花碗322はやや新しく16世紀後葉、他は16世紀前葉。324は青花釉上五彩の色絵皿。16世紀後半の作品。以上は景德鎮製品。323・325・326は青磁碗。326は13世紀前半、他は15世紀後葉の製品。

309・310は唐津皿、17世紀初頭の製品。311・312・313は波佐見窯染め付け碗、いずれも17世紀後半の製品。315は白色の化粧土のうえに鉄釉かと思われる深い赤色釉がかかる。

大溝051の遺物は、15世紀後半以後16世紀末までの遺物が圧倒的多数を占め、これに先行する遺物がわずかに認められ、17世紀の遺物も少量混じるといえる。大溝051埋没以前の寺院の消長を反映しているといえよう。



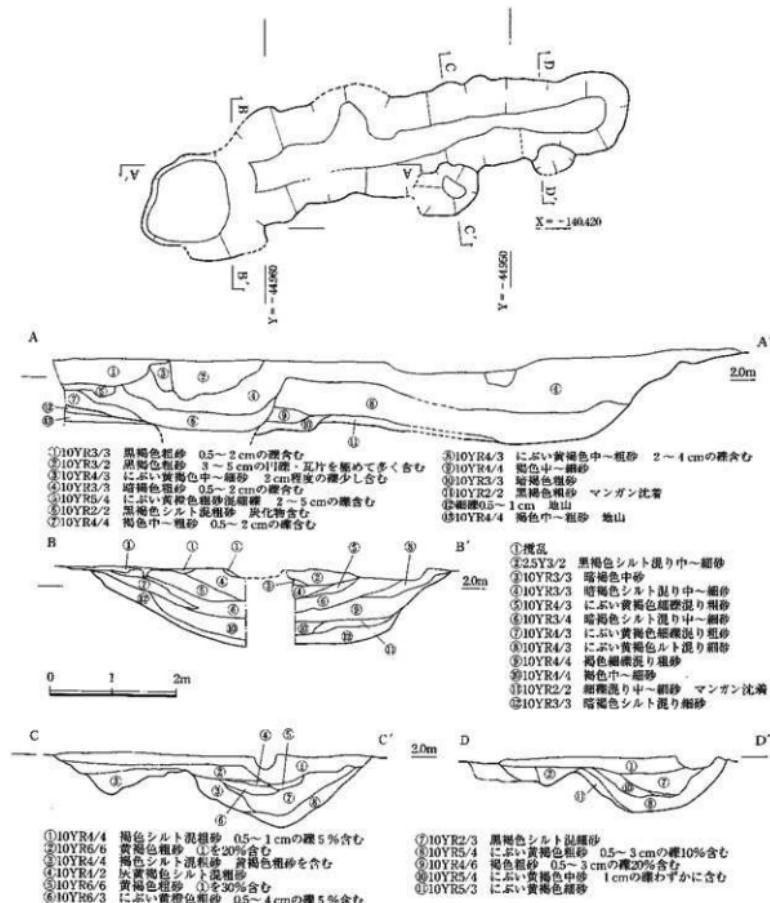
第38図 大溝051出土遺物（5）

落ち込み010

大溝022を切って掘り込まれた東西に長い溝状の土坑である。東西20m、幅3~4m、深さ1m程度で底部は凹凸がある。西端が最も深く1.3m程度でこの部分の底部に瓦が大量に廃棄されていた。

落ち込み010出土遺物

第31図212・219のほか、18世紀末頃の肥前系染め付け碗の他19世紀前半までの陶磁器が出土している。



第39図 落ち込み010平面図(200分の1)・断面図(80分の1)

井戸011

B調査区西端近く、大溝021の北に接するように掘られている。検出面での直径2.5m、漏斗状にすばまり、深さ1mで直径0.8mとなり、これより下部は円筒状に更に深く掘削されている。木質は残存していなかったが、桶枠の上部に瓦を積んで枠とした井戸と思われる。枠瓦は除去された後、埋没したものと思われる。井戸枠瓦・棧瓦・陶磁器が多数出土している。

井戸013

落ち込み010が大部分埋没してからこれを切って掘り込まれている。検出面での堀形は平面円形で、検出面での直径1.9mであったが、落ち込み010の断面での観察では不整形に東西にひろがっており、枠の痕跡は確認できなかった。底はT.P.0.7mまで掘削しているが、他の井戸より浅い。陶磁器が多数出土したが、最新のものは19世紀前半のものである。

井戸016

B調査区北東部、大溝22を切って掘り込まれている。堀形は平面円形、検出面での直径1.35m、上段は瓦枠3段が残存し、下段は桶枠2段である。井戸枠の内径0.75m、下端はT.P.0m付近に達する。

井戸042

C調査区南西部で大溝021の北肩付近を切って掘り込まれている。掘り形はほぼ円形で検出面での直径3.3m、下方は漏斗状にすばまり、検出面から1.4m下方で瓦枠が1段立った状態で、その上に倒壊した枠瓦が重なった状態で検出された。下層は桶枠で枠内最下層からは、一石五輪塔の空風輪・水輪・反花基壇や石仏等の石製品や熱を受けた人頭大の花崗岩が出土している。

井戸050

C調査区、大溝021と大溝051の交点、大溝021の南肩付近に掘り込まれた井戸である。上部には瓦枠が4段残存していた。下段は桶枠が1段埋置されていた。瓦部分の堀形は平面円形で上部は漏斗状に開き、木枠部分は円筒状の堀形である。桶枠下端部はT.P.0m付近に達している。

井戸枠内からは井戸枠瓦のほか、煉瓦片が出土し、堀形内からは19世紀中葉以降の丹波焼破片が出土している。

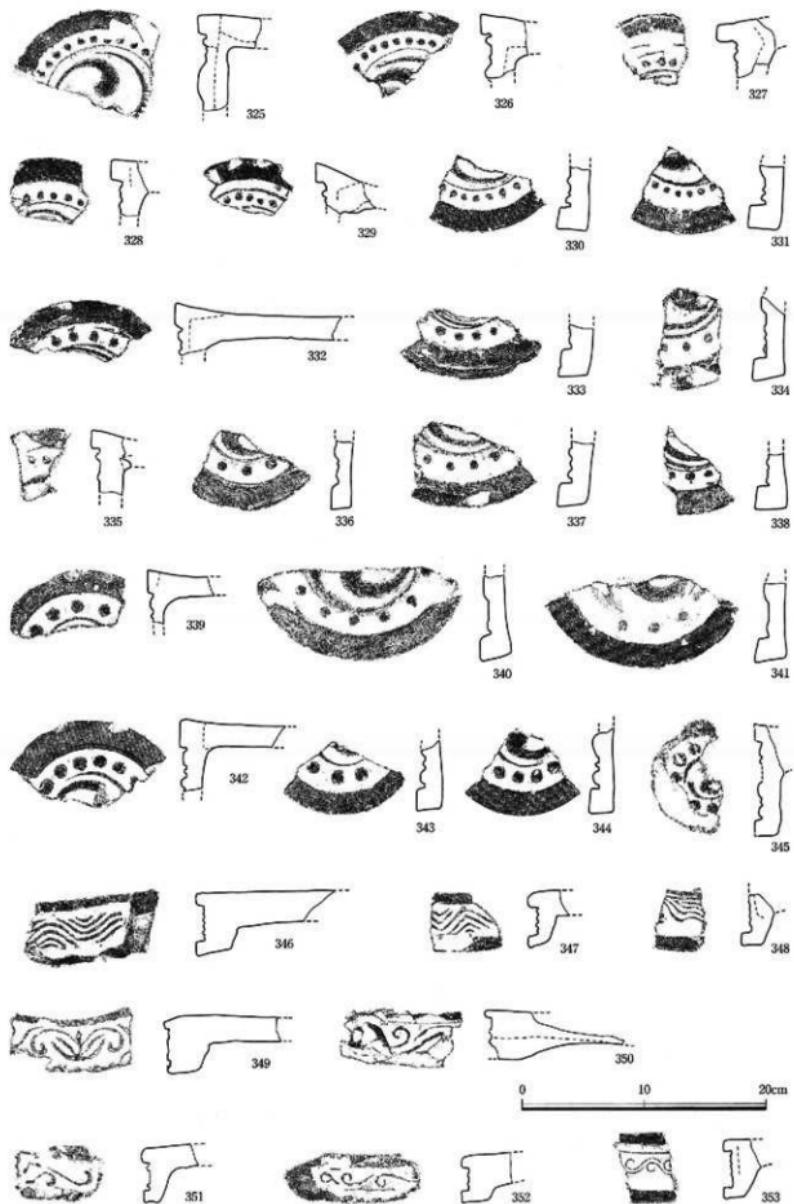
井戸052

大溝021をはさんで井戸050の北に位置する。検出面での堀形は直径1.5~1.8mの不整円形で、検出面から0.9m掘り下げた位置で桶枠の上端を検出した。桶枠は0.65mで1段のみ検出。下端は断面観察によりT.P.0m付近に達していることを確認している。構造からみて上段は瓦枠であったと推定されるが、瓦枠は井戸廃棄時に除去し再利用したものと推定される。

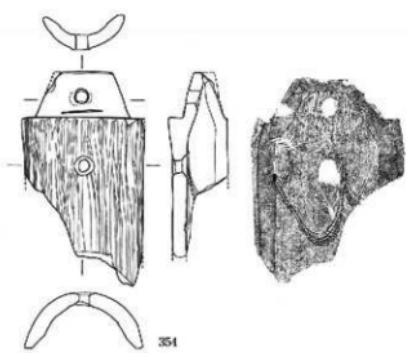
第5節 その他の遺物

瓦

第40図には、調査区内あらゆる位置・層位から出土した軒瓦をすべて掲載した。軒丸瓦では巴

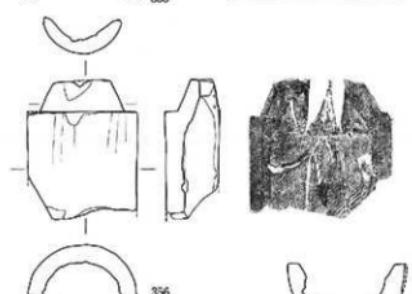
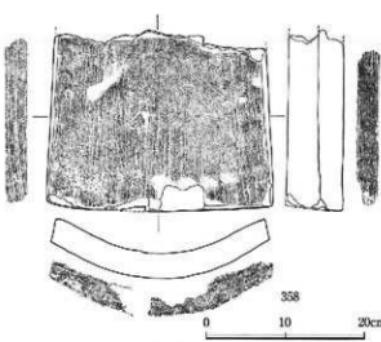
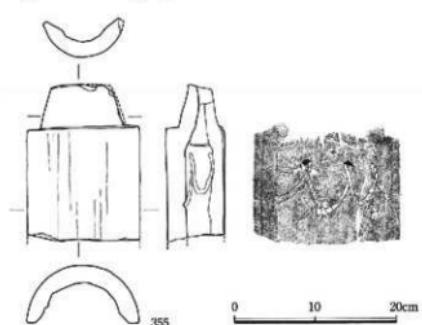


第40図 軒丸瓦・軒平瓦



文のみで、331のみ右巻きのほかはすべて左巻きである。外縁の幅が比較的狭くて高く、外区の珠文が小さく間隔も狭いものから、幅広く低い外縁・大きな珠文を持つものまである。345は棟瓦の瓦当。軒平瓦で文様は唐草文、波状文がある。波状文は左右に連続する中心の波に対してすべての皺が接することなく平行に配されている。

近世の落ち込み010に大量に廃棄された



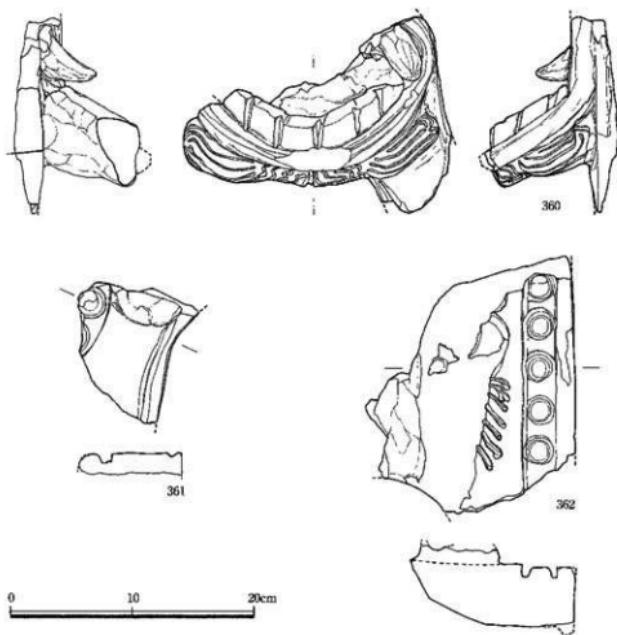
第41図 丸瓦

第42図 平瓦（6分の1）

瓦でみると、丸瓦は外面に縦方向のヘラナデを施すものが全体の半数を占める（重量比。全量25kg）。このうち半数が縄目タタキ痕跡を残している。吊り紐の圧痕が観察できたものは、縄い刺し部分以外の大きくなれさがった部分はすべて布の外面（瓦内面側）に紐が出るものであった。

平瓦では凹面に布面を残すものが約24%、他は平滑にナデ消している。凸面でみると、凹面平滑なものの中33%に離れ砂が認められる。辺長が復元できた瓦を図示した。

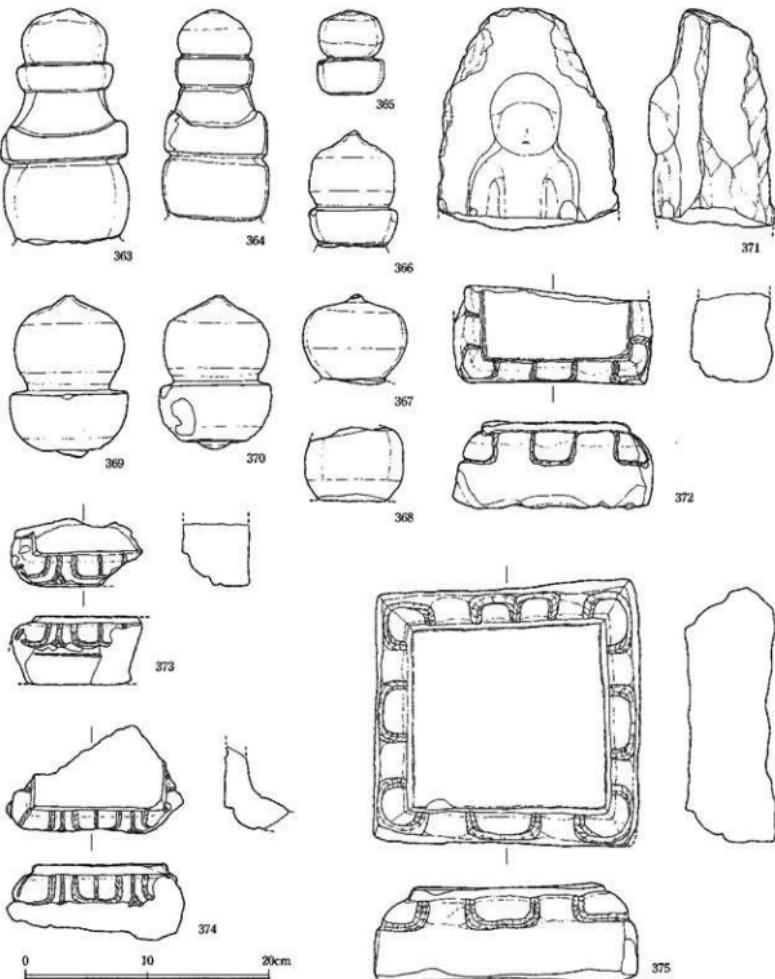
鬼瓦は図示したほか数点出土している。360は下顎部。362と直接は接合しないが、アーチ状の外縁部に立体的なあ頬面を接合したものと思われる。意匠からも室町時代後業としてよいと思われる。



第43図 鬼瓦

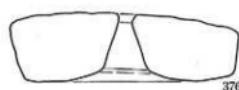
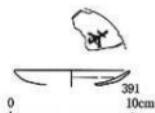
石製品

363～368は一石五輪塔。363・364・366は花崗岩製、多は和泉砂岩製。368は水輪。369・370は花崗岩製五輪空風輪。石仏371は花崗岩製、阿弥陀仏か。372～375は和泉砂岩製の一石五輪塔あるいは宝篋印塔の基壇。373・374は蓮弁を立体的に表現しているが、372・375は線彫り表現である。374は内面を抉っており、全面に火熱を受けている。全体として、16世紀代の遺物と思われる。376は花崗岩製石臼の下臼、溝のない下面は摩滅して平滑。大溝051底面に接して出土。



第44図 石製品（1）

その他、「本」字を書いた墨書き土器（391）は攪乱坑から出土。土製品が落ち込み010などから出土している。380は階段状の橋か。389は小型の硯。388は銅製の小柄（こづか）柄。



第46図 墨書き土器

第45図 石製品（2）



第47図 土製品ほか（2分の1）

第6節 調査成果のまとめ

1 古墳

今回の調査では、古墳時代中期に古墳が築造されていたことが確認された。従来、周辺の調査で埴輪片が出土することから、古墳の存在は推測されていたが、今回の調査では多量の埴輪が出土し、古墳墳丘崩壊土と思われる土層の堆積も確認された。また、古墳への祭祀に伴って供獻されたと思われる須恵器の一括出土もあり、古墳周濠や墳丘・埋葬主体部等は検出されなかったとはいえ、古墳の存在が確実なものとなり、その内容についてもある程度明らかになった。

円筒埴輪や朝顔型埴輪は中小型品のみで、形象埴輪も含むこと、墳丘崩壊土の分布範囲などからみて、数十メートル程度の規模を持つ古墳が想像される。また従来の調査結果からみても古墳の群集した様子は認められない。古墳の時期は、幅広のB種ヨコハケの静止痕跡が傾くものがみられないという埴輪の調整の特徴から見て、期前半の時期で、河内の大型古墳の埴輪編年を援用すれば誉田山古墳に近い時期と考える。

上町台地に展開する中期古墳については、帝塚山古墳以外にも大規模な前方後円墳を想定する説もあるが、その具体的な様相は明らかでない。これら古墳と推定されている造構の実体が解明され、同じ砂堆に立地し家型埴輪が出土したことから推定されている長柄古墳などの実態がより明らかになれば、浪速地域の開発とそれに深く関わった畿内政権、それに組み込まれた勢力の実態が解明されるであろう。

上町台地に展開する大倉庫群は、5世紀半ばから後半のもので、難波堀江の開削に撲る新たな水上交通路の整備に伴って配置されたものと考えられている。「仁德紀」の記載を信用できるものとし、難波堀江の開削をその時期とすれば、崇禪寺古墳は難波堀江開削にやや先行して築造された古墳であって、開削前の唯一の水路であった砂堆の先端に位置するその立地は、被葬者の性格を考えるうえでやはり最も重要な要素であろう。

2 崇禪寺

嘉吉の乱（1441年）の後、細川持賢が主体となって伽藍が整備されたと伝える崇禪寺は、単なる宗教的施設ではなく、陸路では浪速から西国街道や能勢街道に通じ、淀川の水運によっても京都から瀬戸内に繋がる要衝に配置された軍事的拠点としての性格を強く持っていたと考えられる。

寺の南に掘られた大溝は、埋没の時期差は確認できたが、掘削に時期差があったかどうかはわからない。調査者としては、これらの大溝は創建間もない時期に一時に掘られたのではないかと考えている。その根拠は、それぞれの溝の規模がほぼ一致し、南北方向の大溝022と大溝051の間隔、東西方向の大溝021とA区溝1の東西部分との間隔（心々）も、同じ27メートルであって、きわめて計画性・企画性を感じるからである。

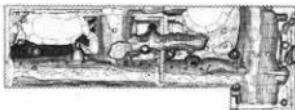
創建当初、方一町の寺域を持ったとされる崇禪寺の寺域が、現在の寺域にはほぼ踏襲されている

と仮定すれば、今回調査で検出した大溝は、寺の南面に二重に巡らされた空濠であって、一部には橋も巡らした、まさに砦の様相を呈していたと推測される。

崇禪寺に敷地を寄進した民部丞景安の渡進状案には「摂津国中嶋惣社領松原内宅町四方此外（以下二行書き）東御敷地堀ヨリ伍丈 西南堀通北庄堺井路・・」（後略『吹田市史第四卷』から引用下線引用者）とあって、創建時の景観を彷彿とさせる「松原」や「堀」があったことがわかる。調査で検出した大溝が直接これらに記載の「堀」であるかどうかは不明とせざるを得ないが、寺やあるいは神社を囲んで「堀」のある景観が発掘調査でも実証されたといえる。

出土遺物からみた寺院の盛衰は、文献の記録と整合している。15世紀半ば以前の遺物はわずかで、15世紀半ば以後16世紀末頃までの遺物がきわめて多い。

近世に至っては、落ち込み010から廃棄されたような形で瓦などが多く量に出土したほかは、井戸が多く掘られることが特徴的である。この頃には調査地は寺域の外側にあって、生産地として開発されていったのであろう。



古墳時代



15世紀中～後葉



15世紀後葉～16世紀中葉



16世紀後葉～17世紀



17世紀～19世紀

第48図 遺構変遷図

報告書抄録

ふりがな	そうぜんじいせき							
書名	崇禪寺遺跡							
副書名	府営崇禪寺鉄筋住宅建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2002-4							
編著者名	阪田育功・辻本武							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
崇禪寺遺跡	大阪市淀川区東中島3丁目	27385	18	34° 43° 59°	135° 30° 32°	2002年1月～ 2002年8月	1,060	府営崇禪寺 鉄筋住宅建 て替え工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
崇禪寺遺跡	古墳	古墳時代中期	古墳痕跡 溝	埴輪 須恵器		供獻須恵器・括出土		
	寺院	室町時代後期から近世	寺域東西大 溝 井戸 土坑	瓦質土器 土器 陶磁器 瓦 墨書き上器 ふいご羽口 すき入り焼土		崇禪寺の寺域を画する大溝が寺の南面 に2重にめぐる		

図 版

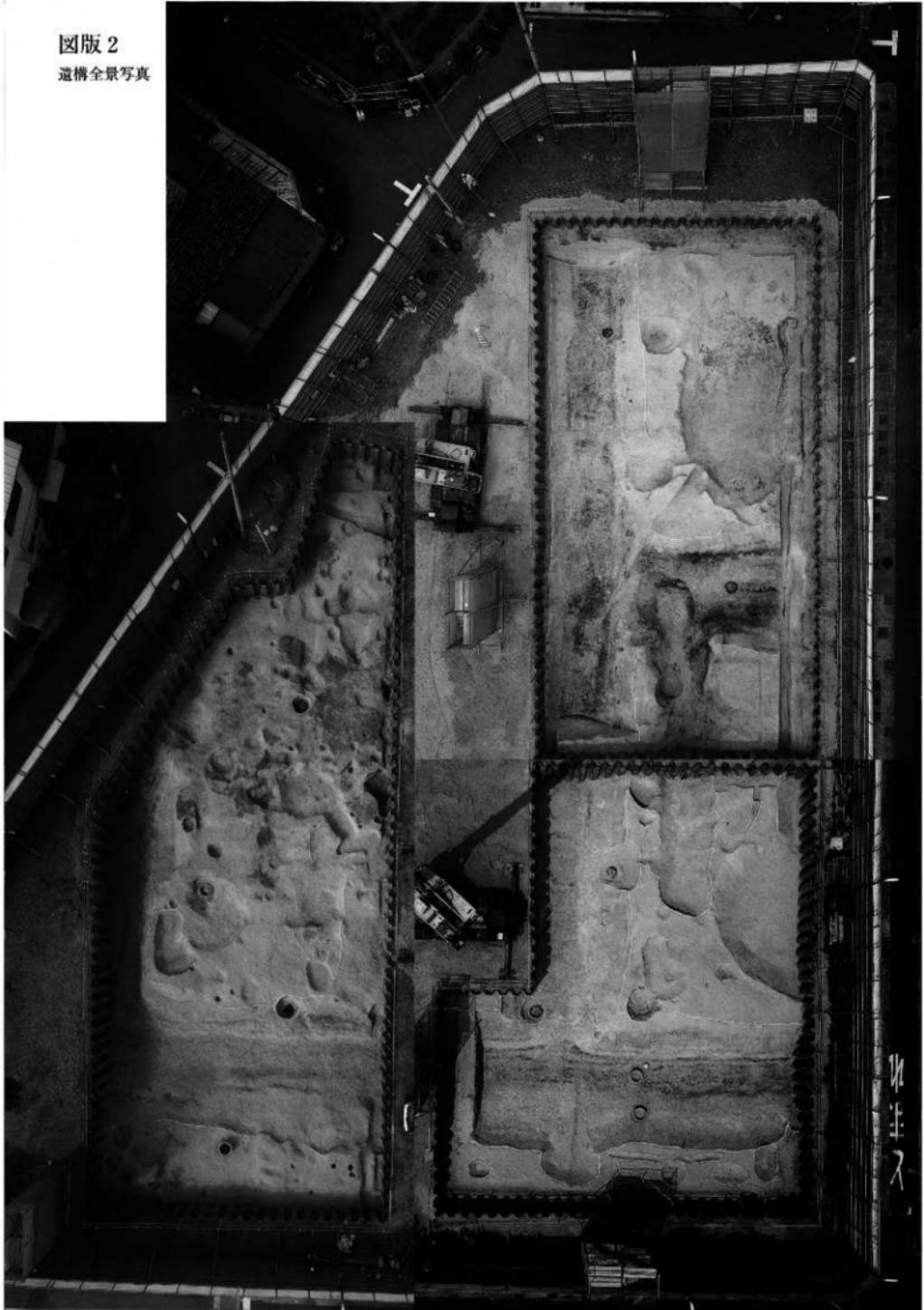
図版1

調査地周辺航空写真



図版2

造構全景写真



図版 3

a A区 溝9
須恵器出土状況 (1)



b A区 溝9
須恵器出土状況 (2)



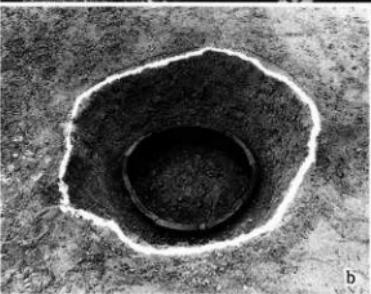
c A区 溝9
須恵器出土状況 (3)



図版 4



a A区 大溝1



b 列井戸12

c 列井戸 8

図版 5

a B区 大溝022
手前は大溝021



b 大溝022 埋土断面



c 大溝022 底
スサ入り焼土塊出土状況



図版 6

a C区 大溝021
柱穴検出土状況
(西から)



b B区 大溝021
柱穴検出土状況
(西から)



図版 7



a B区 西壁
大溝021 埋土断面



b B区 西壁
古墳墳丘崩壊土堆積状況



c B区 大溝021柱穴



d C区 大溝021
右手前大溝051



e 柱穴25



f 柱穴28

図版 8

a C区 大溝051
完掘状況（南から）



b 大溝051
埋土断面（南から）



c A区 大溝1
（=大溝051）
埋土断面（北から）



d・e 大溝051内
落込058



図版 9

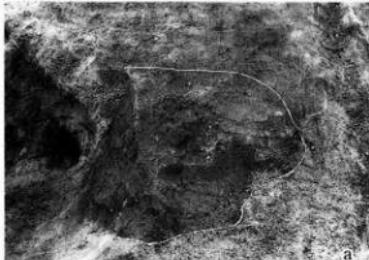


a B区 落达010
検出状況



b 落达010 完掘状况

a · b 土坑017



c · d 土坑018



e 落込010 (C区)



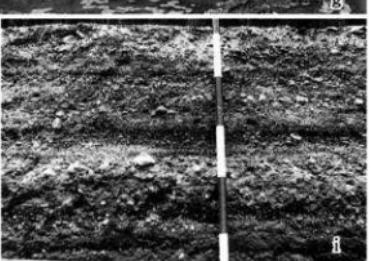
f 井戸050



g A区下層土層断面
東—西



h B区 下層土層断面
東—西



i B区 下層土層断面
南—北

図版11

溝9出土須恵器（1）



3



6



4



5



2



8



7



1

図版12

溝9出土須恵器（2）



9



10



11

图版13

円筒埴輪・朝顔形埴輪



67



68



67



68



68



67

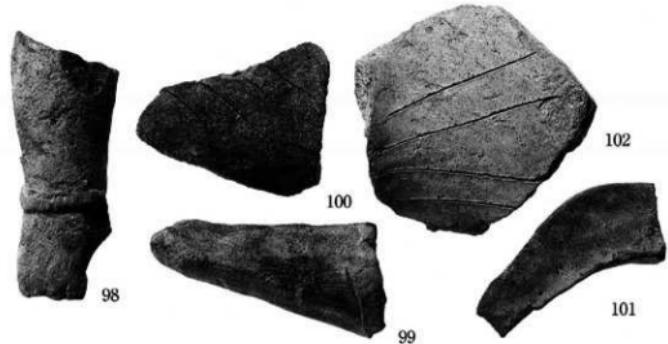
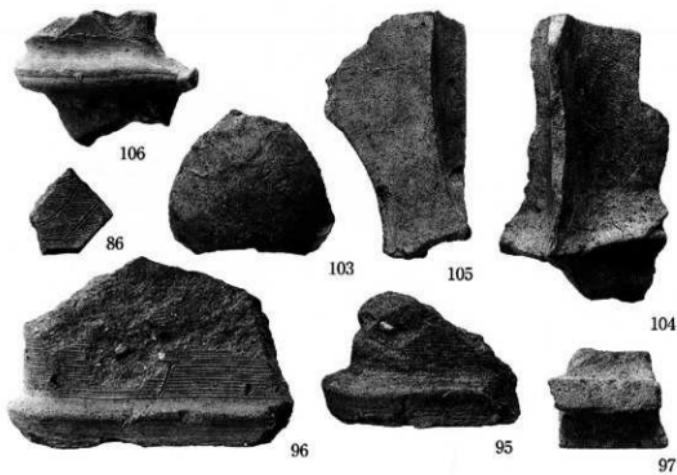
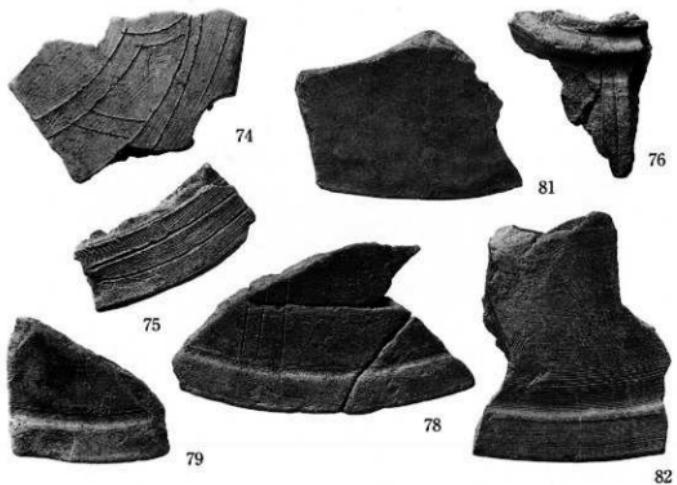


13



15

图版14
形象埴輪



図版15

大溝022出土 すさ入り焼土



179



179



195



193



194



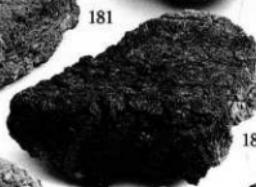
193



196



191



180



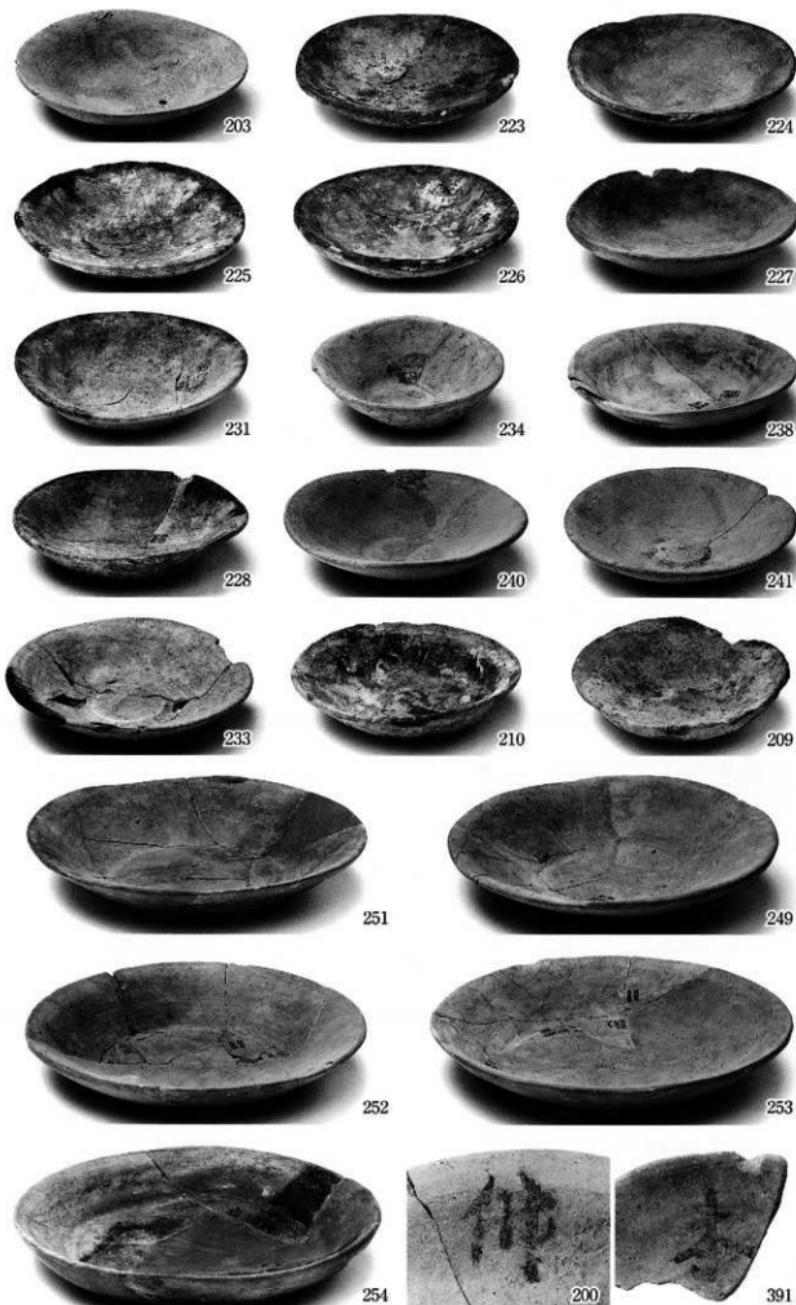
192



190

図版16

大溝051出土 土師器皿・墨書き土器



図版17

大溝051出土器 大溝022出土ふいご羽口



256



269



257



258



301



299



300



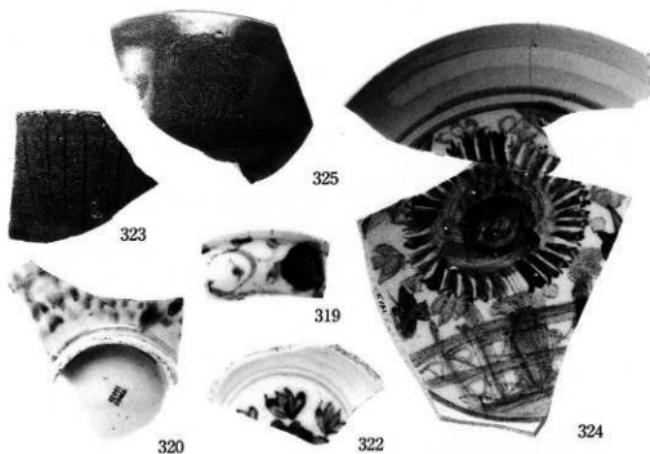
278



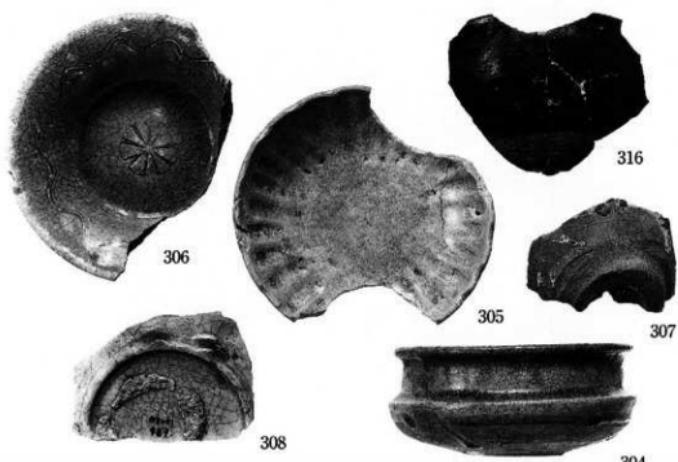
390



390



大溝051出土輸入磁器



大溝051出土陶器



土製品

図版19

軒丸瓦 軒平瓦 鬼瓦



340



325



337



342



349



346



350



351



362



360

大阪府埋蔵文化財調査報告2002-4

崇禪寺遺跡

- 府営崇禪寺鉄筋住宅建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

発行年月日 2003年3月31日

編集・発行 大阪府教育委員会

〒540-8571大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351(代)

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

